

六月廿四日

文部省雜誌  
第十號

Y. H. K. B. 1111



文部省雜誌 第十號

五月廿五日發行

文部省雜誌 第十號

明治七年六月十五日發行

明治七年五月十八日東京師範學校 臨幸ノ節文部省長官及ヒ學校督務モルレ一教師スコット等詞ヲ奏シ優等生徒へ賞賜アリ之ヲ左ニ掲ク

文部省長官奏詞

臣等恭シク惟ルニ教育ノ要ハ小學ヲ普及セシムルニアリ小學ヲ普及セシムルハ教員ヲ造成スルニアリ爰ニ其種ヲ此校ニ下シ其花ヲ闡國ニ觀ル培養ノ力忽ニスヘカラサル所以ナリ今 陛下親ク此校ニ臨御ス何ノ幸福カ之ニ如シ願クハ 陛下教育ノ德澤洽ク海内ニ光被センコトヲ臣等謹テ奏ス



學校督務モルシテ奏詞

恭シク祝辭ヲ 日本天皇陛下ニ奉ル 陛下從來貴國人民教育ノ  
爲メ銳意セラル、ハ實ニ我輩ノ欣喜ニ堪サル處ナリ伏テ惟ミルニ本  
日、臨御ヲ蒙リタル此學校ハ文部卿輔ノ特ニ注思スル所ニシテ此校  
ハ即チ師範タル者教導ノ端緒ヲ授タル方法ヲ仔細ニ講習スル所ニ  
此校及ヒ他ノ師範學校ニ於テモ貴國ノ語ヲ以テ將ニ教育ノ利益ヲ圖  
國ニ擴張セントスル教員ヲ養成スル所ナリ本日 陛下ノ此校ニ

臨御アリシハ後日教員タルノ重任ヲ受ヘキ青年生ニ於テハ誠ニ不朽  
ノ撫愛至大ノ幸福ト云フヘキナリ青年生等既ニ斯ノ如キ政府ノ恩庇  
ヲ蒙ルハ他日卒業ノ期其得ル所ノ才藝ヲ以テ必ス勉勵シ人民ノ利

ニ奉仕スルノ外國人少カラス而シテ我輩ノ奉職スルトコロ其勞カスル

トコロニ比スレハ未ダ著明ノ功績ヲ奉呈スルノ期ニ至ラズ然レモ我  
輩貴國人民教育ノ進歩ヲ希祈スルノ意ハ全ク誠實ヨリ出ル者ナリ予  
モ亦 陛下ニ奉仕スルノ一員タルヲ以テ今謹テ祝辭ヲ奉ス即チ

陛下ノ聖壽悠久ニシテ洪福疆リナク且其人民ニ裨益セントスルノ仁  
意速カニ透徹センコトヲ是祈ル

教師スコット奏詞

凡ソ國家ノ富強ヲ致ス所以ノ者ハ專ラ人知ノ開達ニアリテ固リ土地  
ノ自然ニ因ラサルナリ而シテ其人知ヲ開達スルハ學校ヲ設ケ教育ヲ務  
ムルニ在リ學校ノ設ケ教育ノ務メタルヤ必シモ巨金ヲ費スヲ以テ要  
トセス其長師ヲ得ルニアルノミ蓋シ教化ノ治浹ニ因テ國家ノ富強ヲ



致スノ疑ヒ無キト現今世界中最モ盛大ナル國ヲ以テ之ヲ徵スヘシ其  
 學校ヲ設立スルヤ宜ク先ツ師範學校ヲ以テ要ト爲スヘシ  
 明風ニ  
 叡思ヲ人民教化ニ注シ今日此師範學校ニ親臨セラル我儕ニ  
 於テ深ク感激ニ堪ヘサル所ナリ抑此學校ヲ設立シテ人知ヲ開達スル  
 ノ基ヲナスハ專ラ  
 陛下ノ聖意ニ出ツルヲ以テ其人民ノ曾ク開化  
 ニ進ミ國家ノ富强ニ赴クハ此學校ヲ以テ嚆矢ト爲スヘシ余冀クハ人  
 民ヲノ永ク此盛大ナル教育ノ聖澤ニ浴セシメンコトヲ聊カ此ニ鄙衷ヲ  
 啓沃ノ恭シクニ  
 陛下ノ萬歳ヲ奉祝ス  
 優等生徒へ賞賜  
 本校生徒

鳥取縣士族

安場 正房

廿八年三月

新潟縣平民

藤塚 唯一

廿二年四月

滋賀縣士族

小林 義則

廿四年七月

山梨縣士族

權太 政

廿三年二月

新潟縣平民

山宮 竹次

廿一年三月

八十四日

三重縣士族

大野 德孝

廿二年四月

福岡縣士族

永田 慎七郎

四十二年四月

大分縣士族

狹間 重亞

廿七年三月

新治縣平民

古渡 資秀

廿三年二月

第四級



茨城縣士族

沼田 順匡

廿六年八月

栃木縣士族

松岡 太原

三十一年十一月

右國史學要一部ツ

附屬小學生徒

下等第五級

埼玉縣平民和美男

田口茂一郎

八年六月

静岡縣士族亨二男

杉 成吉

七年十二月

東京府平民要三女

西澤

八年四月

静岡縣士族六三郎男

中村松太郎

七年九月

名東縣士族小三郎男

小澤 元吉

八年三月

東京府平民

澤 有三郎

八年十一月

熊谷縣士族恒之弟

内村弟三郎

八年一月

遠藤 繁勝

八年五月

同士族叔清二男

菅谷 元治

七年六月

同平民勇二女

三谷 きよ

七年十月

右雅俗幼學新書一部ツ

同級

東京府士族正利女

稻子 ひて

八年三月

同士族時中男

横井亮之助

九年八月

同士族秀三郎女

早野 よし

七年二月

同華族正恒厄介

阿部 かく

六年十一月

同華族德潤女

池田 五う

六年十一月

山口縣士族如恒二男

平賀精二郎

六年十月



文部省  
雑志  
第...

下等第八級

静岡縣士族

石川定一郎

七年五月

東京府士族

徳山 秀榮

六年八月

高知縣士族 幸喜男

山川 幸雄

六年一月

東京府士族 義和二男

山下 兎與二

六年三月

右泰西訓蒙圖解一部ッ、

八十一頁  
三卷  
同平  
八十一頁  
八十一頁



文部省雜誌 第十一號

り  
り  
り  
り



文部省雜誌 第十一號

文部省雜誌 第十一號

明治七年六月廿三日發行

本年三月第一大學區東京開成學校ニ於テ定期試験ニ因テ生徒等級ヲ  
定ムル如シ

平井 訓法學豫科第一級 和音 豐井 兼二 飯田 藤井

三浦川 和夫 菊池 武夫 小村 壽太郎 齋藤 脩一郎

入江 陳重 岡村 輝彦 向坂 兌 野村 鈔吉

中山 寬六郎 市川 右元級 木 山口 進五郎 大隈 健夫

武野 同豫科第二級 三原 登林 並藤 富源 財

河上 謹一 高村 健三 西川 鍊次郎 山崎 旨重



久米 祐吉 本山 正久 畠山 重明 青木 保  
江澤 一郎 藤田 隆三郎 松村 任藏 富塚 恂  
市川 雄大木 房英 山岡義五郎 矢野 武夫  
中山實六 右元級

理學豫科第一級

長谷川芳之助 松井 直吉 原口 要 杉浦 重剛  
平井晴次郎 南部 球吾 櫻井 錠二 增田 禮作  
西村 貞 谷口 直貞 關谷 清景 澤木元四郎  
高須 錄郎 田中 克己 宮崎 鉾彌 久原 躬絃

右元級

磯野 德三郎 伊藤 新六郎 中久木 信順 高松 豐吉  
石黒 五十二 巖谷 立太郎 中久木 信倫 石松 錢太定  
竹尾 將信 鈴木俊三郎 佐竹 三義久 渡邊 洵一郎  
岡田 十三 杉岡 政人

右元級

同豫科第三級

宮原 直堯 福田 良作 北村 重孝 高山 甚太郎  
大島 道太郎 瓜生 泰 小林 啓之助 仙石 貢  
渡邊 渡 三田 善太郎 種田 織三 小林 桓之丞  
土藤 勇作 福與 藤九郎 小林 六郎

右元級



同豫科第四級

門井 保定 大澤論太郎

右元級

諸藝學豫科第三年下級

古市 公威 山口 半六 櫻井 房記 土原六四郎

櫻井 省三 沖野 忠雄 山口 宗義

右豫科第三年上級へ昇進

同豫科第一年上級

中村 義也 千本 基 大島三四郎 中村 恭平

沼 辰四郎 水谷 立太忍 石藤 木豐太 小山田銓太郎

右豫科第二年下級へ昇進

同豫科第一年下級

一瀬勇三郎 野本 彦一 豐田 周衛 寺地 左吉

右豫科第二年下級へ昇進

同豫科第一年下級

福原 直道 福田 東吾 野友山昌美 鮫島 晉

入江鷹之助 牧元 貞 池田 穆 小林 有也

田上 省三 坪田 秀清 和田 勇治 加瀬 代助

中村 精男 三輪桓太郎 石野輔次郎

右豫科第一年上級へ昇進

鑛山學豫科第一級



安東 清人 村岡 範為 馳 和田 維四郎 大前 寬忠

大塚 義一郎 池松 崎 廉 高橋 順太郎 寺西 多喜雄

關林 澄藏 神足 勝詔 保志 虎吉

田土 右元級 田三 表 田 良 田 賦 田 升 田

大式 淵 同 豫科 第三級 貞 田 小 林 實 田

寺田 勇吉 津澤 岩太 中隈 山 敬造 志賀 泰山

小木 貞正 田原 良純 白井 濟 藤川 次郎

板屋 久三郎 遠藤 竹造 橋爪 源太郎 中村 彌六

齋藤 良寬 猛 本 一 豐田 三 吉

沼 右元級 平 下 田 吉

溝口 信清 千葉 嘉次郎 八木 長恭 直井 房太郎

城戶 種久 櫻井 小平 太 島田 吉誠 小柴 保人

島田 耕一 岡 胤信 戶田 吉義 瀬川 癸卯太郎

木村 垣乎 乃美 辰一 佐藤 三吉

青木 右元級

田中 吉 同 豫科 第六級 彌平

山田 密 董 久後 元長 綱 祐 脩吾 御堀 耕助

工業 學 豫科 第六級 甲

川上 新太郎 和田 正幾 富谷 光孚 平岩 常保

壙島 六一郎 西 松三郎 三宅 常倫 千頭 清丞

大原 鎌三郎 河原 勝治 福島 龜住長 小藤 文三郎



磯野 繼三 詠 鏡子郎 田幸 文鐘 浦

木谷 米備一 郎 渡邊 本太郎 曾良 誠太郎 喜多村 彌太郎

川土 澤 太右豫科第五級 昇進 昌谷 光平 平岩 當村

同豫科第六級 史 逸 甲

肥田 密三 織田 顯五郎 夏吉 犬吉 中村 徳恒

田中 吉之助 孫福島 逸 廉平

小太 右丞級 昇進 昌谷 光平 平岩 當村

木村 同豫科第六級 乙 逸 一 武藏 三吉 中村 謙六

田中 謙吉 岡 山計 可田 吉謙 藤川 突眼 大源

越中 蘇右豫科第五級 平 昇進 島田 吉福 小柴 裕人

橘 協和 中村 研三 坂崎 直道 山本 謙三

同内田 三省 秋山 源藏 山下 同傳 吉 蓮池 惟孝

杉岡 氣口 政久 栗石 田 二男 雄 足立 震太郎 笠原 昇 恭格

野服 源 孫 福 秘 坂田 貞一 吉田 彦 兼 郎 佐々木 忠三郎

青木 西匹五郎 源 小木 貞五

同策二 逸 右豫科第六級 卜定 同策二 逸

同策一 小林 試業 赤濟 生徒 安東 壽人

志井 糟 林 鷺 郎 木村 乙吉 中村 巖 山 符 翁 策 田 川 逸 三郎

花輪 虎太郎 前田 肇 鈴木 敬作 佐々木 正

東京 渡邊 鎌三郎 大村 謙 典 次 保田 定 則 藤 由 精 太 郎 命

室岡 〇 虎次 水野 國次郎



室岡 ○貞夫 木理 國水源

東京開成學校三於テ今般定期試験ノ後更ニ公選以テ生徒級長ヲ命

スル左ノ如ク大源 前田 藤田 鈴木 中林 鑛山 學豫科第一級三源

法學豫科第一級 木村 山吉 中林 鑛山 學豫科第二級三源

小村 壽太郎 安東 清人

同第二級 同第二級

青木西川 鏡次郎 小木 貞正

理學豫科第一級 吉田 同第三級 八木 長恭

同第三級 同第六級 同第六級

同第二級 同第六級

瓜生 泰 三宅 常倫

諸藝學豫科第三年上級 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

同 同第六級

今般第七大學區宮城師範學校附屬小學開業ニ因テ入學ヲ許ス生徒左

ノ如ク



宮城縣管下

大槻 桂一郎 同  
真柳 長平太 同  
高橋 虎太 同  
今泉 兼小大學 却官 兼 神學 對州 國小 學 判 兼 角 因 入 學 七 年 十 一 月 月

高橋 〇 同

高橋 〇 同

同 第一半土燼 同

佐吹沐 浪治 同

同 第二半土燼 同

真野市清兵衛 同

清藤學賢 祿三年土燼 同

金須 主 同

同 同

菅井 元三郎 同

同 同

沼邊 左太郎 同

宮城縣管下 六年十一月 同

寺崎 彌兵衛 同

同 同

小塚 文八郎 同

同 同

利田 吉良 同

同 同

諏訪宗右衛門 同

六年十一月

遠藤 保三郎 同

六年

横尾 よふ 同

六年十一月

同 第六燼 同

松浦空右衛門 同

同 同

三浦 忠之丞 同

六年一月 千葉縣管下

山崎 根之助 同

七年

齋藤 宗近 同

七年

氏家 孝和郎 同

六年六月

菅 氏 同

六年八月

同 同

佐々木十太郎 同

六年十一月

鹿又 のぶ 同

六年七月

諏訪喜右衛門 同

七年

後藤 幸之助 同

同 同

加藤 比呂 同

六年八月

清和 同

六年

新井 彦三郎 同

六年二月

安部 同

六年八月

安部 同

六年八月

安部 同

六年六月

同 同



同

宮崎 吉兵衛

七年

須江 かつじ

六年三月

古木 きよし

七年

同

古木 良三郎

六年

千葉 幸胤勝

六年一月

菅原 常吉

六年八月

同

小林 安藏

六年七月

小林 宗次郎

七年

本城 保次

六年十月

宮城縣管下 同

山岸 敬治

七年

山岸 財次郎

六年

桑原 如則

六年

同

伊庭 勝之助

同

伊庭 馨次郎

同

水野 治

同

磐前縣管下 同

阿部 甚之進

七年

白江 大場

七年

龜治

足利縣管下 同

總計四十八人内

男三十五人

女十三人

足利縣實屬士族

祇董弟

山口 東大

井上 重成

同

右夙ニ父母ヲ喪ヒ養兄祇董ノ爲ニ養ハル然ルニ祇董重病ヲ得テ他ニ

看護ヲ次ハシ是ヲ以テ醫家ニ往復シ藥餌ヲ煎調シ及ヒ爨炊洒掃ノ事

ニ至ル時テ重成皆善以之ヲ辨理シ適小學校創設ニ際テ就學勉強ス然

ル事是ヲ始テアルヲ以テ動モス事ヲ登校ノ時限ニ差テ屢教員



督責ヲ受ク唯敬肅シテ唯々スルノミ毫モ分疏ヲナサズ同學ノ兒傍聽ニ堪ヌ訴ルニ實況ヲ以テシ事情始メテ晰ナリ重成平素登校自ラ行廚ヲ調ス行廚調セサル時ハ往々午餐ヲ省ク然レモ遂ニ饑惰ノ色ヲ見サスト云

同縣管下相州大住郡

長持村副戸長覺左二男

田口 東次郎

小田原驛千度小路平民川崎與五平二男福次郎ト云者本年常備兵ノ籤ニ當レリ然ニ父母ノ多病ナルヲ以テ其侍養ヲ闕シテ憂ヒ親子額ヲ聚メテ相歎嗟ス適東次郎傍聽シテ其孝誼ニ感シ福次郎ニ代リテ備兵タラシコヲ請ヒ遂ニ縣廳ノ許可ヲ得タリ福次郎欣悅ニ堪ヌ謝スル私有スルニ意ナク乃父母ニ量リテ親戚ノ貧乏ヲ救助シ且其餘金七十圓ヲ以テ其區内學校ノ費用ニ供セリ

右重成ハ幼年ニシテ能悌道ヲ殫シ且學事ニ勉強スル而已ナラズ敢テ家道ノ艱險ヲ言ハズ東次郎ハ他人ノ孝誼ヲ憐恤シテ自ラ備兵ノ籤ニ代リ加之謝金ヲ以テ親戚ノ窮乏ヲ救ヒ并ニ建學ノ朝旨ヲ奉體シテ餘財ヲ寄附スル等俱ニ衆庶ノ標準トスルニ足レリ依テ縣廳ヨリ各賞金ヲ下與シ且内務省へ開申シテ賞賜ヲ願フト云

筑摩縣管下

信州伊那郡高遠村

内田 定四郎

大縣二十餘ノ以テ賞賜スルニ云

筑摩縣管下信州伊那郡小原村ニ白山ト云處アリテ白石ヲ産ヌ定四郎



此碎粉ヲ以テ石盤ヲ煉造スルコトヲ發明ス洋算習字ノ用ニ適セリ代價  
大約二十錢ヲ以テ發賣スト云

第一大學區東京開成學校生徒各般ノ事故有テ退學スル者四名アリ左

ニ記突、且内務省へ開申シテ賞賜ヲ願ヒテ

相々寄附スル等見ニ來照ノ懸望イヌルニ理學豫科第二級

外ハ賦金ヲ以テ獎勵スル等見ニ來照ノ懸望イヌルニ理學豫科第二級

右兩名父疾病且家貧至ルヲ以テ家族教育ノ爲メ退學セシメテ請

フ仍テ退學ヲ許ス

圓々以テ其同區學徒ノ費用ニ對シ

理學豫科第二級

木村

乙吉

右兩名疾病ニ嬰リ勉業スル能ハス仍テ退學ヲ命ス



文部省雜誌 第十一號

文部省雜誌編輯部編輯

第一號 明治二十九年一月一日發行  
第二號 明治二十九年二月一日發行  
第三號 明治二十九年三月一日發行  
第四號 明治二十九年四月一日發行  
第五號 明治二十九年五月一日發行  
第六號 明治二十九年六月一日發行  
第七號 明治二十九年七月一日發行  
第八號 明治二十九年八月一日發行  
第九號 明治二十九年九月一日發行  
第十號 明治二十九年十月一日發行  
第十一號 明治二十九年十一月一日發行  
第十二號 明治二十九年十二月一日發行



文部省雜誌  
第十二號

り  
あ  
ま  
り  
あ  
ま  
り



文部省雜誌 第十二號

文部省雜誌 第十二號

明治七年七月十五日發行

今般第一大學區東京醫學校ニ於テ明治六年ヨリ七年ニ至ル冬半期生徒學業ヲ試験シ教授獨乙人「ミュルラ」及ヒ「ホフマン」ヨリ開申セル表左ノ如シ

一等本科生

一ノ甲

岡

玄卿

須田

哲造

橘

良佐

印東

玄得

原田

豐

一



菅野 順 柳下 貞橘 小林 玄海 中村 良益  
宇野 朗

一ニノ不及二ニノ有餘

山崎 元脩 吉田 貞準 三浦 省軒 大多和七郎

濱野 昇 櫻井郁太郎 山崎 泰介 赤鹿 東策

二

河野 貫道 松澤 元貞 野口 安次 山田小彌太

渡邊梯次郎 長谷川順次郎 三浦 浩一 小野 梁吉

石川 仲全 大川 宗炳 大河内 和 室賀 六郎

二ニノ不及三ニノ有餘

淺川 岩嶺

全期病ニ罹ルヲ以テ番外トス

今村

去三

二等本科生

一

高階 經本 佐々木 政吉 佐々木 文蔚 清野 勇

一ニノ不及二ニノ有餘

半井 英輔 大森 治豊 梅 錦之丞 鳥瀧 恒吉

二

河野 衢 清水 郁太郎 田澤 敬輿 神内 由巳

石黒 宇宙治 長尾 俊貞 野並 魯吉 熊谷 玄且

熊谷 省三 濱田 玄達 片山 國嘉



二ニノ不及三ニノ有餘

魚住 以作 管 之芳 小林 廣 外山 林助

川上 清哉 北山 錦三郎 新藤 二郎

三

白山 琢磨 朝山 義六 上田 完治 伊東 盛雄

三ニノ不及四ニノ有餘

豐田 準平

四

相原 眞澄

久ク病ニ罹ルヲ以テ番外トス

一等預科生

一ノ甲

花房直三郎 小山 哉

中根 重一 丹海 丙吉 丹波 敬三 沼波 貞吉

榊 大叔 緒方 正規 神田知次郎 杉田 大雄

榎本 與七郎 下山 順一郎

一ニノ不及二ニノ有餘

弘田 長 堤 公一 伊勢 錠五郎 篠原 專次郎

吉田 學 秋田 秀精 中村 信三郎 伴野 秀堅

立石 清美 長尾 精一 森永 友健 鈴木 孝之助



松永 信一 高橋 増次郎

二

坂本 常長 石井 重義 太田 仙朔 森 賢

中村 正道 高橋 三郎 永淵 嘉博 三村 徳太郎

二ニノ不及三ニノ有餘

高橋 俊太郎 橋 玄昌 奈良坂源一郎 佐野 龍太郎

及川 良吉 新宮 涼亭 賀古 鶴所 鹿島 武雄

丹羽 藤吉郎

三

伊東 祐命 村松 安之 山縣 眞吉 砂子 秀二

中島 一可 藏田 忠助

三ニノ不及四ニノ有餘

高木 文種 佐藤 俊良

四

垣沼 擴 神保 文輔

半期病ニ罹リ闕席スルヲ以テ番外トス

井上 虎三

二等預科生一ノ部

一ノ甲

前田 常三郎

一

牧 亮四郎 江澤 敬一郎 甲野 斐 伊部 彛



島田 完吾 片山 芳林

一ニノ不及二ニノ有餘

飯田 信順 山形 仲藝 中目 忍 谷口 謙

森 林太郎

二ニノ不及三ニノ有餘

野川 次郎 有持 蕃 後藤 謙齋 木村 欽哉

武野 恭 金野 文伯 時任 寛 猪原 吉郎

國司 正七郎 澁谷 虎太郎 小池 正直 富永 文民

二ニノ不及三ニノ有餘

中島 篤 山科 元忠 出口 慶吉 長町 耕平

長谷川

賢三

中島

芳郎

乙照

瑞鼎

毛利

私一

村田 信意

三

群馬 鉦太郎 松坂 亮造 渡邊 清 三輪 開太郎

戸塚 卷藏 二宮 忠周 宮内 紵五郎 兒玉 貞介

吉川 三郎 鈴木 麟三 猪脇 勝三

三ニノ不及四ニノ有餘

安田 義順 原 豪潮 魚住 正之助 木村 十海

小柴 盛

四

竹内 壽三郎

番外



山田 秀太郎

二等預科生二ノ部

一ノ甲

三瀨 秀玄 中濱 東一郎

一

熊谷 茂樹 藤本 理 熊谷 幸之助 緒方 収二郎

一ニノ不及二ニノ有餘

山田 五一 横田 貫一 山本 次郎平 桐原 隆橘

篠原 通壽 荒川 悦太郎 榎並 志雅三

二

高木 原 田代 正 下山 泰藏 野澤 小野 春岡

山本 正己 中西 司馬 富田 泰藏 野澤 左市

早川 良太郎 柳 竹次 宮崎 鑿之助 岡 文造

木塚 又造

二ニノ不及三ニノ有餘

小林 順道 辻岡 友造 太田 彌太郎 小澤 環

三澤 輔三郎 馬島 璋太郎

三

柏原 長英

三ニノ不及四ニノ有餘

守屋 良三郎 秋野 惟命 森脇 恂

四



鈴木 春臺 安藤 準平 寺田 友道 長與 眞造

木村 昇 大場 龍造

四ニノ不及五ニノ有餘

金澤 宗純 土生 莊之輔 竹崎 義夫

五

本多 泰安 藤 瑞言

○

第四大學區廣島師範學校ニ於テ試験ノ上入學ヲ許ス生徒左ノ如シ

廣島縣管下

福井 吉太郎

同

尾野 漸

同

隅田 彦一

岩本 誠之助

二十三年六月

河野 景四郎

二十年七月

最上 熊之助

二十四年三月

同

玉置 九郎

二十年一月

同

土屋 甚四郎

二十六年七月

同

三戸 八百藏

二十年

同

大石 龜太郎

二十年

同

由良 丈一郎

二十二年三月

同

賀川 哲造

二十三年三月

同

坂戸 暘之助

二十二年八月

同

名井 吉之丞

二十年

同

齋木 貞次郎

二十年六月

同

瀨島 庫次

二十年

鳥取縣管下

榎本 光遠

二十一年一月

同

服部 五百機

二十年十一月



同 佐々木 輯一 二十年七月  
同 安田 憲一 二十年二月  
同 松岡 成喬 二十四年一月

同 松尾 熊藏 二十年  
同 遠藤 藤藏 二十一年四月  
同 安場 武治 二十年二月

同 太田 成謙 二十年六月  
同 佐々木 亮 二十一年四月  
同 湯口 信好 廿三年十一月

同 岩崎 觀瀾 二十年八月  
同 小谷 喬 二十四年七月  
同 圓城寺 文藏 二十三年一月

同 三和 長民  
同 坂田 常次郎  
同 梶野 祐久 二十二年

同 島根縣管下 本郷 豐之丞 二十年  
同 津田 眞太郎 二十年一月  
同 堀尾 守眞 二十二年

同 奥村 讓 二十一年三月  
同 渡部 寛一郎 二十年五月  
同 堀尾 守眞 二十二年

同 成瀬 邦彦 二十二年三月  
同 西川 扇之助 二十二年三月  
同 小田縣管下 楯岡 文藏 二十六年九月

同 藤井 森太郎 三十四年一月  
同 岡 寛齋 二十四年五月  
同 岡村 正義 二十年

同 愛媛縣管下 渡邊 唯一 二十一年十一月  
同 二宮 茂 二十二年八月  
同 武市 義道 二十三年



同

楳戸 宣一郎  
二十五年二月

同

森井 孝二郎  
二十二年六月

同

瀧山 圖南  
二十年三月

同

柏木 貞  
二十三年六月

同

宮本 茂績  
二十四年一月

同

兵頭 清行  
二十一年

濱田縣管下

堀 孫柄  
二十四年

名東縣管下

能仁 寂惠  
二十二年二月

同

能仁 寂雲  
二十年

三瀨縣管下

山口 鑰太郎  
二十二年十一月

同

東 陽輔  
二十五年二月

福岡縣管下

白石 修太郎  
二十年

白川縣管下

赤星 爲巳

山口縣管下

坂根 正夫

同

黒杭 寛

同

小原 聞一  
二十年一月

同

末村 猛夫  
二十年十月

同

中原 肇  
二十四年三月

廣島縣管下

佐竹 旗次郎  
二十三年四月

同

淺井 尹次郎  
二十年一月

同

三宅 彰  
二十年

愛媛縣管下

加藤 正藏  
二十四年三月

同

告森 良

濱田縣管下

安藤 洋乎  
二十五年四月

和歌山縣管下

赤城 維羊  
二十九年四月

愛媛縣管下

安藤 知顯  
二十三年八月

廣島縣管下

河野 謙之祐  
二十年

同

藤井 喬藏  
二十七年二月

同

永井 久太郎  
二十三年

同

小幡 瀧之進  
二十年五月



山口縣管下

稻葉 春雄

二十年十一月

廣島縣管下

種野 廣太郎

二十年

同

佐竹 秦之助

二十六年

同

末森 太郎三

二十年

小倉縣管下

津田 熊彦

二十五年五月

同

永野 恰

二十一年九月

鳥取縣管下

武信 迪藏

二十九年三月

山口縣管下

有田 要治

二十二年二月

同

綿貫 謙輔

二十七年八月

同

神代 兼濟

二十年二月

廣島縣管下

杉村 貞一郎

二十年

山口縣管下

伊藤 敏雄

二十三年四月

同

棧 玉城

二十年

廣島縣管下

林 吾一郎

二十年

同

兒玉 政之進

二十年

山口縣管下

栗山 保

二十年

廣島縣管下

柴田 茂三郎

二十一年三月

山口縣管下

河野 庸允

二十年

同

折下 雅介

二十年一月

廣島縣管下

酒井 熊太郎

二十四年七月

山口縣管下

海老名 恕介

二十年

廣島縣管下

檜崎 俊夫

二十二年二月

山口縣管下

東 一

二十四年七月

同

小枝 將楚

二十年二月

○ 總計百二名

本月二日第一大學區東京師範學校ニ於テ病ニ罹リ到底成業ノ目的ナ  
キヲ以テ退學ヲ命スルモノ一名



二級生徒

福岡縣管下

永田 慎七郎

同十日同校ニ於テ到底成業ノ目的ナキヲ以テ退學ヲ命スルモノ五名

四級生徒

東京府管下

横山 正憲

愛媛縣管下

村尾 則固

千葉縣管下

矢部 謙次郎

東京府管下

吉田 良顯

同

仲野 太一郎

ナキヲ以テ退學ヲ命スルモノ二名

二等預科生

新治縣管下

與住 戎三

青森縣管下

山崎 賛

同六日同校ニ於テ到底成業ノ目的ナキヲ以テ退學ヲ命スルモノ一名

預科第三級

相川縣管下

島倉 敏之

本月三日同校ニ於テ冬半期學課大試問應答出群ニ付褒賞ヲ與ル生徒

左ノ如シ

- 一 象牙聽胸器 銀打診器 各一箇

本年五月七日第一大學區東京醫學校ニ於テ病ニ罹リ到底成業ノ目的



本科第六級

大坂府管下

岡

玄卿

須田

哲造

橘

良佐

筑摩縣管下

三重縣管下

置賜縣管下

三瀨

謙三

和歌山縣管下

印東

玄得

千葉縣管下

原田

豐

本月一日第七大學區宮城師範學校ニ於テ學業ヲ試驗シ上等生ニ昇等

セシムルモノ左ノ如シ

宮城縣管下

矢吹

董

同

國分

行道

同

男澤

抱一

相川縣管下

宮城縣管下

水澤縣管下

岩佐

美光

千葉

恒平

戸板

省吾

宮城縣管下

鹿股

秀治

若松縣管下

佐治

次太郎

同

松浦

延壽

宮城縣管下

志村

恒敬

磐前縣管下

神田

信因

同

荊宿

仲衛

宮城縣管下

菊地

祐吾

若松縣管下

河野

喜八郎

本月十日第一大學區東京外國語學校ニ於テ學力未滿ニ付各一級ヲ降

スモノ四名

佛語學上等第六級官費生



小田縣管下

鹽田

仁松

佛語學下等第五級

静岡縣管下

丸毛

直利

東京府管下

大村

善二郎

同

石原

慎之助

本月六日同校ニ於テ久シク病ニ罹リ到底成業ノ目的ナキヲ以テ退學ヲ命スルモノ一名

漢語學第一級官費生

長崎縣管下

彭城

邦貞

今般第三大學區大坂師範學校ニ於テ學力試驗ノ上入學ヲ許ス生徒左ノ如シ

大分縣管下

南

和

二十四年九月

岡山縣管下

武田

信御

二十四年九月

同

高橋

孫太郎

二十年十一月

同

赤松

能得

廿一年七月

小田縣管下

阿部

東作

二十年

和歌山縣管下

久保

盛之助

廿八年四月

堺縣管下

西田

宗益

二十八年十月

京都府管下

小谷

時平

二十年七月

堺縣管下

吉田

浩一

二十一年五月

大坂府管下

曾我部

信雄

二十年五月

小倉縣管下

富來

大俊

二十五年二月

山口縣管下

松尾

貞馬

廿三年十月



堺縣管下

福井 宗二郎

二十年四月

總計十三名

南	赤松	小	大	山	高
二十	二十	二十	二十	二十	二十
...	...	...	...	...	...



文部省雜誌  
第十三號



明治七年七月十八日發行

種痘ハ天然痘ヲ豫防スヘキ靈貴ノ良法ニシテ其効ノ確實ナルヲ毫モ疑  
ヲ容ル、所ナシ西洋諸國此法行ハレテヨリ今ニ七十六年之カ爲ニ天  
然痘ノ慘毒ヲ免ル、者幾億兆ナルヲ知ラス造物主此良法ヲ降シ痘難  
ヲ除キ永ク人民ヲ繁殖セシムルヲ豈感戴セサルヘケンヤ此法ハモト  
英國ノ醫シ<sup>エ</sup>ン<sup>チ</sup>ト云ル人ノ發明セル所ナリシ<sup>エ</sup>ン<sup>チ</sup>ト嘗テ某ノ醫ノ  
家ニ寓スル時偶々一村女來リテ診ヲ乞フ其師診シテ痘瘡ナリト謂フ  
村女答テ余ハ嚮ニ牛ノ乳汁ヲ絞リシキ其牛ノ痘瘡ニ感シ既ニ發シタ  
レハ復此患アルヘカラスト云リシ<sup>エ</sup>ン<sup>チ</sup>ト側ニ在テ此語ヲ聞キ忽チ思



ラク今此牛痘ヲ用井ハ必ス天然痘ヲ豫防スルヲ得ヘシトコレヨリ奮  
發勉勵ノ心カヲ殫シ此事ヲ究察セント欲シテ歷試經驗スルコト二十年  
遂ニ斷然其効ヲ確定シテ先ツ己カ子ニ之ヲ施シ一千七百九十八年(我  
寛政十年)始テ其說ヲ世ニ公布セリ當時皆之ヲ疑テ信スル者ナク或ハ  
魔法妖術トシ或ハ牛ノ病ヲ人ニ移スト云ヒ詆毀百端謗議競起レリ然  
レモ固ヨリ真正確實ニシ且ツ毫モ危害ナク一旦之ヲ施セシ者ハ天然  
痘ノ大ニ流行スル際ニ在テ絶テ之ニ罹ルコトナシ故ニ人々次第ニ之ヲ  
信用シ前ニ誹謗セシ輩モ漸ク悔悟スルニ至リ遂ニ英國ノミナラス遠  
ク諸國ニ傳播シテ各邦各土陸續種痘院ヲ設立シ廣ク之ヲ施スニ至レ  
リ 本朝ニ於テモ亦嘉永己酉ノ歲蘭醫「モンニ」キト云フ者其痘苗ヲ長  
崎ニ舶齎シ始テ此法ヲ傳ヘテ以來衆醫之ヲ施行スルコト茲ニ二十六年

其効百發百中其術至簡至便ニシテ少モ危懼スヘキ所ナキカ故ニ次第ニ  
世上ニ流布シテ天然痘ヲ患ル者大ニ減スルニ至レリ然ルニ蒙昧ノ徒  
尙未タ悟ラス或ハ此ニ由テ餘病ヲ誘起スト云ヒ或ハ生涯多病ナリト  
云ヒ其長期ヲ愆リテ遂ニ天行痘ノ爲ニ其愛兒ヲ奪ハル、者亦少カラ  
ス嗚呼何ソ頑愚ノ甚シキヤ此法若シ危害アルコト果ノ其謂フ所ノ如ク  
ナラハ安ソ夫ノ文明諸國之ヲ尊信スル事久シクノ益々行ハル、ノ理  
アラシヤ又安ソ 本邦ニ於テモ如此廣ク流布スヘケンヤ夫レ痘瘡ノ  
害ハ火ヨリモ甚シ一家火ヲ失スルハ近隣ヲ延焼スレモ火ハ唯家財  
ヲ焚クノミ痘ハ許多ノ人命ヲ損ス故ニ西洋諸國ニ於テハ此法至ラサ  
ル所ナク又少年子弟ノ學校ニ入り兵籍ニ加ハル等ノ時ハ必ス先ツ種  
痘濟ノ證書ヲ出サシムルト云リ世ノ父母タル者其子ノ安全成長ヲ慮



ラハ舊染ノ迷ヲ醒シテ活眼ヲ開キ早ク種痘シテ其殃厄ヲ豫防シ又各相戒メテ之ヲ他ニ及ホスコ勿レ誠ニ如此スルハ此法一般ニ普及シテ終ニ天然痘ノ流行ヲ絶ツニ至ランニ至ラシキ事ニ至リテ是レ以前ニ述ルカ如ク種痘ノ術ハ至簡至便真正確實ノ良法ナレドモ之ヲ施スニハ先ツ痘苗ノ良否ニ注意シ勉テ善良ナルモノヲ選用スルコト緊要ナリ然ラサレハ經年ノ久シキ漸々其本性ヲ變シ預防ノ力ヲ減シテ天然痘ニ再感スル者ナキニアラス故ニ西洋諸國ニ於テハ深ク此事ニ注意シ善良ノ苗ヲ得ンカ爲ニ牛痘種繼所ヲ設ケテ常ニ牛牯ヲ蓄養シ時々痘苗ヲ下シテ其苗ヲ更新セリ一千八百七十一年(明治四年)蘭國ハーグ府ニ於テモ亦種痘所ノ傍ニ此一局ヲ開キタリ其報告ニ曰ク同年六月六日始テ牛牯一頭ヲロツテルダム府ノ種繼所ニ遣シ彼ノ牛牯ノ痘漿ヲ

取テ其乳房ニ種エ同日率テハーグニ還ル十三日十四日(即チ種後第八日第九日)其漿ヲ取テ他ノ牯ニ移シ爾來常ニ牛牯二頭ヲ蓄養シ其苗ヲ絶タス此年ヲ終ルマテ此新苗ヲ種ル者七百三十四人其他村落ニ分苗スルモノ百二十四箇所ナリト其用心至レリト謂フヘシ如此スルハ痘苗常ニ善良ニ種後久シキヲ經ルトモ其効力衰耗スルコトナカルヘシ然ルニ本邦ニ於テ從來用ル痘苗ハ皆其原種ヲ外國ニ取ルモノニシ然レト雖モ一二年前輸入セシ者ニ過キス故ニ其効力新ニ牛牯ヨリ得ル者ニ比スレハ自ラ多少ノ差異ナカル可ラス況ヤ數十年來人ヨリ人ニ傳ル舊苗ニ於テヲヤ其性効變易減衰ノ往々再感スル者アルヲ知ルヘシ加之毎歲隆寒盛暑ノ候ハ種痘兒少キヲ以テ間々其苗缺乏スルノ患アリ豈一大關事ナラスヤ此ニ由テ文部省ニ於テ本年五月牛痘種



六  
繼所ヲ東京馬喰町ニ設ケ時々牛牯ニ移種シテ當ニ新鮮良粹ノ原苗ヲ  
貯ヘ以テ全國ノ需ニ應セントス乃チ六月七日牯牛牯ノ生後二月ヲ經  
タルモノニ就テ其内勝ニ下苗スルヲ左右各十八箇皆善ク發出ス十三  
日(種後第七日)其漿ヲ取テ之ヲ小兒ニ種ルヲ十人次日又種ルヲ十人其  
發痘悉皆善美ニ之ヲ從前ノ痘苗ニ比較スレハ其性効遙ニ勝ルヲ覺  
フ又試ニ舊漿ヲ取テ右腕ニ施シ此新漿ヲ取テ左腕ニ施ス者八人左腕  
ハ皆全發スレドモ右腕ハ發セサルモノアリ其發スル者モ左腕ノ勢ノ  
ヨキニ如カス是ニ於テ新舊ノ優劣判然トノ明ナリ今ヨリ後善苗長ニ  
本邦ニ繼續ノ復彼ニ仰クノ慮ナク此ニ由テ此法ヲ施サハ其効愈確實  
ニメ復再感ノ虞ナカルヘシ寔ニ曠古ノ一美事ニシテ人民ノ大幸ト謂  
フヘシ目今此術ヲ施ス者ハ早ク此良苗ヲ得テ普及セシメ之ヲ受ル者

ハ其鴻益ヲ尊信ノ猶豫スルヲ勿レ



文部省雜誌

第十四號



文部省雜誌第十四號

文部省雜誌第十四號

明治七年八月四日發行

一金三圓

一金三圓

一金三圓

第二大學區筑摩縣管内小學校ヲ設立スル既ニ五百有餘今夏縣官學事ノ實況ヲ檢査セン爲メ伊那諏訪ノ二郡ヲ巡リ教育ノ緊急ナルコトヲ説諭セシカ人心愈振興一般學校資本ノ爲メ納金スルモノ前後合計二十六萬余金ニ至レリ加之又各自其邑里學校ノ爲メニ納金スルモノ八十二名アリ是皆僻陬窮乏ノ老幼婦女ニシテ其出ス所ノ金ハ夫ハ索綯婦ハ紡績或ハ他ニ行備シ或ハ自儉節シ夙ニ拮据夜ニ黽勉以テ數十年ノ積ミ得ル所ニアラザルハナシ而シテ一旦奮然囊ヲ殫クシテ吝ナラス其心ノ教育ニ深切ナル其行ノ衆庶ニ超出スル豈奇特ト謂ハサルベケン



ヤ因テ縣官内務省ニ具狀シ褒賞ヲ請フト云フ今其名氏ヲ示ス右ノ如シ

伊那諏訪二郡特別獻金人名

- 一金七拾五錢 太田 重安 一金八拾七錢五厘 山下志賀八寅太郎妻
- 一金壹圓 有賀 ちん 一金壹圓 有賀 とう辰五郎妻
- 一金壹圓 上沼久四郎 一金壹圓 林 治郎八八十八歳
- 一金壹圓 松村 いろ 一金壹圓二十五錢 川上まぢへ伊左衛門妻 瀧三郎妻
- 一金壹圓二十五錢 光田 眞吉 一金壹圓三十二錢 馬場 金衛常次郎曾祖母八十六歳
- 一金壹圓三十錢 内田定四郎 一金貳圓 上沼 ろの慎藏母
- 一金貳圓 佐々木幸作 一金貳圓 橋部 つな
- 一金三圓 平九郎母 中村 たみ 一金三圓 小池 傳藏

- 一金三圓 丸山八五郎 一金三圓 細田 庄八伊三郎妻
- 一金三圓 小池 ちか 一金三圓 松島 むめ彌源次母七十八歳
- 一金三圓 網野 甚藏 一金三圓 寺澤 ふゆ平藏娘
- 一金三圓 林 彦四郎 一金三圓 佐藤 とち英一郎母
- 一金三圓 池上伊兵衛 一金二圓五十錢 北村 いさ
- 一金五圓 大澤 ろね 一金五圓 古村 利八福右衛門母
- 一金五圓 馬場 勘衛 一金五圓 馬場 喜七基重母
- 一金五圓 多賀 いま 一金五圓 平田 りり安兵衛妻
- 一金五圓 中坪 ゆか 一金五圓 鹽澤 つね清次郎母
- 一金五圓 木村千代の 一金五圓 北原 ちと直四郎叔母
- 一金五圓 齋藤 ちと 一金五圓 千葉 せん



一金五圓	小池喜右衛門	一金五圓	小林	初藏
一金六圓	櫛原 安平	一金拾圓	小野安五郎	
一金拾圓	有賀兵右衛門	一金拾圓	熊谷 友衛	
一金拾圓	御子柴又惠務	一金拾圓	熊谷 又藏	
一金拾圓	小池新兵衛	一金拾圓	松崎 源助	
一金拾圓	小澤 傳十	一金拾圓	栗林 藤藏	
一金拾圓	唐澤 榮藏	一金拾圓	三澤信十郎	
一金拾圓	古村 庄八	一金拾圓	小町谷三郎次	
一金拾圓	岡田 太造	一金拾圓	筒井 源造	
一金拾圓	筒井義三郎	一金拾圓	宮脇 文吉	
一金拾圓	屈藏妻	官脇志やう	新五郎妻	竹内いとの

一金拾圓	新兵衛妻	橋部よしを	一金拾圓	小川	りき
一金拾圓	松澤新九郎	九右衛門母	一金拾圓	松島貞治郎	
一金拾圓	原 みな	官兵衛妻	一金拾圓	原 かと	
一金拾圓	原 うめ		一金拾圓	小川 金藏	
一金拾圓	米澤三重郎		一金拾圓	堀田 多一	
一金拾圓	名取用右衛門		一金拾圓	鮎澤 静修	
一金拾圓	藤森 平助		一金拾圓	有賀 源六	
一金拾圓	雨宮白右衛門		一金二拾圓	青山 稠祿	
一金二拾圓	平田 基重		一金二拾圓	原九右衛門	
一金三拾圓	喬 現明		一金五拾圓	北澤 八郎	
一金五拾圓	松村 傳平		一金五拾圓	片桐治郎平	



總計金七百二十一圓二十四錢五厘

○

岡山縣管下

谷川 管

右ノ者明治六年三月第一大學區東京開成學校ニ於テ規則ヲ犯セシニヨリ退學ケ上以後公私學校ニ入ルコトヲ禁スル旨同六年文部省第二十六號ヲ以テ達セシ所今般此禁ヲ解カンコトヲ請ヒ其悔悟ノ證明確ナルヲ以テ自今官公私ノ諸學校ニ入ルコトヲ許セリ

○

第五大學區三瀨縣下

小頭町三丁目町頭

小川龜二郎

右今般小頭小學設置之際未ダ校舍アラサルヲ以テ己カ宅ヲ借シ假學校ニ供シ且自ラ生徒ヲ勸誘シ五日ヲ不出シテ入學スル者八十餘名猶日ヲ逐ヒ増加スルノ勢アリ其僻陋ニ在リテ能ク世運ニ應シ教育ノ急ナルヲ知リ己カ宅ヲ借シ以テ其業ヲ助ケ人民向學ノ志ヲ振興シ生徒就學ノ實效ヲ舉グルコト能ク己カ職分ヲ盡ス者ト謂フヘシ因テ縣官之ヲ褒賞スト云フ

○

本年六月第一大學區東京師範學校ニ於テ小學師範學科卒業證書ヲ與フル者左ノ如シ

鳥取縣管下

安場 正房

二十八年四月

滋賀縣管下

小林 義則

二十四年八月

置賜縣管下

百束 誠助

二十五年



山梨縣管下

權田 政  
二十四年

新潟縣管下

藤塚 唯一  
二十二年五月

同

山宮 竹次  
二十二年四月

山梨縣管下

中川 亨  
二十五年三月

同

太田 勉  
二十四年六月

三重縣管下

阿保友一郎  
二十五年十月

東京府管下

高木 正謙  
二十二年十月

鳥取縣管下

田中 尚  
二十五年一月

置賜縣管下

黒井小源太  
二十三年五月

千葉縣管下

隅谷 琢  
二十二年

三瀨縣管下

菊池資五郎  
二十三年十一月

千葉縣管下

上野 彰  
二十六年八月

同

成田 剛藏  
二十九年

總計十六名

本年七月第七大學區宮城師範學校ニ於テ小學師範學科卒業證書ヲ與フル者左ノ如シ

磐前縣管下

茅根 公義  
二十四年十一月

若松縣管下

松山 若冲  
二十六年一月

山形縣管下

林兎喜太郎  
二十四年一月

岩手縣管下

宮 勇  
二十三年四月

茨城縣管下

本多 重房  
二十五年五月

若松縣管下

大場源之丞  
二十四年一月

山形縣管下

中島 泰平  
二十六年六月

岩手縣管下

瀨山 鐘  
二十五年十月

宮城縣管下

木村 敏  
二十四年三月



磐前縣管下

衣笠 弘

二十二年四月

宮城縣管下

大石 常雄

三十九年七月

總計十一名

同月同校ニ於テ學力ヲ試驗シ入學ヲ許ス生徒左ノ如シ

官城縣管下

安藤 逸平

二十三年二月

同

遠藤 琢磨

二十四年六月

同

鈴木 安利

二十四年十月

同

八谷 用藏

二十五年十一月

同

引地 力

二十二年六月

同

石川 通道

二十年

同

佐藤 信有

二十二年

同

間宮今朝治

三十二年十一月

福島縣管下

高木 遵

二十五年五月

青森縣管下

土岐 八郎

二十三年四月

同

對馬 運作

二十三年七月

山形縣管下

一谷鎭二郎

二十三年十一月

同

遠藤 貞吉

二十四年六月

同

水谷左久馬

二十年三月

同

田中大二郎

二十八年

同

清水 常吉

二十年

水澤縣管下

原田 與由

二十一年四月

同

主藤 源吾

二十五年二月

同

清野 隼太

二十三年二月

酒田縣管下

鈴木折之助

二十九年六月

同

桑原 道一

二十二年

磐前縣管下

三輪 正治

二十七年九月

總計二十二名



本年七月第六大學區新潟師範學校ニ於テ學力ヲ試驗シ入學ヲ許ス生徒左ノ如シ

新潟縣管下

長谷川三郎

二十年五月

同

池上信五郎

二十年十二月

同

佐藤 隼治

二十二年十二月

同

山縣佐一郎

二十二年十月

同

星野忠三郎

二十年十一月

同

長澤 謙内

二十年二月

同

今井 退藏

二十三年二月

同

宮越 省吾

二十二年三月

同

毛利清次郎

二十八年九月

同

中澤 中

二十一年十一月

同

村井 康平

二十年三月

同

朝倉喜太郎

二十年二月

同

安田 修藏

三十二年七月

同

三好 義雄

二十八年十二月

同

縦山廣五郎

二十年七月

同

藤田 好重

二十年五月

同

重野 經行

二十年三月

同

石井 發藏

二十年一月

同

小笠原經倫

二十三年八月

同

高橋 文造

二十年一月

同

糺 經行

二十二年七月

同

和氣清太郎

二十年二月

同

矢口知久也

二十年三月

同

堀 小太郎

二十年二月

高知縣管下

中西 勇雄

二十年一月

青森縣管下

小松忠之輔

二十年二月

同

館山 守司

二十二年四月



# 文部省雜誌 第十五號

若松縣管下

中野 豐記

二十二年二月

新川縣管下

野崎 質

三十四年四月

山形縣管下

林 煥郎

二十年十一月

同

根本利三郎

二十五年二月

○ 總計三十一名

和歌山縣管下

和田 銳夫

二十五年八月

右ノ者第三大學區大坂師範學校ニ於テ規則ニ戻リ剩ヘ教官ノ説諭ヲ拒ミ悔悟ノ意ナキヲ以テ本月四日退學ヲ命セリ



文部省雜誌 第十五號

文部省雜誌第十五號

明治七年八月二十八日發行

本年七月第一大學區東京開成學校ニ於テ夏期學業試驗ニヨリ生徒ノ等級ヲ定ムルヲ左ノ如シ

法學本科第三級

東京府管下

三浦 和夫

宮崎縣管下

小村 壽太郎

敦賀縣管下

齋藤 脩一郎

椽木縣管下

向坂 兌

岩手縣管下

菊池 武夫

東京府管下

岡村 輝彦

千葉縣管下

中山 寬六郎

愛媛縣管下

入江 陳重

熊谷縣管下

野村 鈔吉

同 豫科第一級



青森縣管下

西川 鐵次郎

山口縣管下

河上 謹一

千葉縣管下

高橋 健三

小田縣管下

青木 保

愛媛縣管下

藤田 隆三郎

東京府管下

畠山 重明

同

本山 正久

小田縣管下

山岡 義五郎

茨城縣管下

松村 任藏

東京府管下

江澤 一郎

新潟縣管下

市川 雄

千葉縣管下

富塚 恂

新治縣管下

大木 房英

大分縣管下

矢野 武夫

理學本科第四級

佐賀縣管下

長谷川 芳之助

敦賀縣管下

南部 球吾

長崎縣管下

原口 要

石川縣管下

平井 晴二郎

同

櫻井 錠三

岐阜縣管下

松井 直吉

滋賀縣管下

杉浦 重剛

椽木縣管下

西村 貞

大分縣管下

増田 禮作

奈良縣管下

谷口 直貞

北條縣管下

久原 躬弦

宮城縣管下

澤木 元四郎

岐阜縣管下

關谷 清景

敦賀縣管下

宮崎 銚彌

同 豫科第一級

三瀨縣管下

磯野 德三郎

石川縣管下

石黒 五十二

滋賀縣管下

巖谷 立太郎

三重縣管下

中久木 信順

東京府管下

竹尾 將信

同

高松 豐吉



石川縣管下	岡田 一三	茨城縣管下	伊藤 新六郎	石川縣管下	鈴木 俊三郎
埼玉縣管下	渡邊 洵一郎	福岡縣管下	石松 定	新潟縣管下	佐竹 義久
三重縣管下	中久木 信倫	石川縣管下	杉岡 政人	同	前田 肇
同	同	第二級	同	同	同
石川縣管下	高山 甚太郎	同	福田 良作	岩手縣管下	大島 道太郎
高知縣管下	仙石 貢	東京府管下	瓜生 泰	同	小林 啓之助
椽木縣管下	三田 善太郎	東京府管下	渡邊 渡	同	小林 恒之丞

諸藝學豫科四年下級

愛媛縣管下	宮原 直堯	開拓使管轄	種田 織三	青森縣管下	工藤 勇作
飾磨縣管下	古市 公威	島根縣管下	山口 半六	石川縣管下	櫻井 房記
豐岡縣管下	沖野 忠雄	石川縣管下	櫻井 省三	東京府管下	沼 正忠
新潟縣管下	中村 義也	愛知縣管下	中村 恭平	岐阜縣管下	千本 福隆
長崎縣管下	大島 三四郎	同	同	同	同
同	同	第三年上級	同	同	同
小田縣管下	豐田 周衛	長崎縣管下	一瀬 勇三郎	小田縣管下	石藤 豐太



東京府管下 石川縣管下 東京府管下 忍

紡方 重三郎 小山田銓太郎 水谷

新川縣管下 柏崎縣管下 新川縣管下 鷹之助

林 三忠正 鮫島 晋 入江

石川縣管下 福田 東吾 同 鷹之助

同 第三年下級

福島縣管下 堺縣管下 岡山縣管下 省三

和田 勇次 小林 有也 田上

飾磨縣管下 東京府管下 豐岡縣管下 池田 穆

福原 直道 野々山 昌美 同 加瀬

山口縣管下 東京府管下 同 代助

中村 精男 坪田 秀清

鹿兒嶋縣管下 同 第二年上級

鈴木 省八 靜岡縣管下 石野 輔次郎

東京府管下 三輪 桓一郎

鑛山學豫科第一級

白川縣管下 鳥取縣管下 小田縣管下 大塚 義一郎

安東 清人 村岡 範為馳

敦賀縣管下 石川縣管下 佐賀縣管下 松崎 廉

和田 維四郎 寺西 多喜雄

東京府管下 石川縣管下 小田縣管下 關 澄藏

大前 寬忠 高橋 順太郎

白川縣管下 神足 勝記

白川縣管下 神足 勝記

神足 勝記



同 第二級

東京府管下 敦賀縣管下 佐賀縣管下

寺田 勇吉 中澤 岩太 中隈 敬造

石川縣管下 佐賀縣管下 變媛縣管下

小木 貞正 田原 良純 志賀 泰山

愛知縣管下 東京府管下 佐賀縣管下

藤川 次郎 白井 濟 板屋 久三郎

岩手縣管下 飾磨縣管下 鳥取縣管下

齋藤 寛猛 中村 彌六 遠藤 竹造

濱松縣管下

橋爪 源太郎

同 第三級

東京府管下 千葉縣管下 秋田縣管下

城戸 種久 小柴 保人 溝口 信清

岐阜縣管下 濱松縣管下 東京府管下

佐藤 三吉 櫻井 小平太 島田 吉誠

同 同 長崎縣管下

岡 胤信 瀨川 癸卯太郎 島田 耕一

宮城縣管下 熊谷縣管下 筑摩縣管下

千葉 嘉次郎 八木 長恭 戸田 吉義

宮城縣管下 山口縣管下 東京府管下

木村 坦乎 乃美 辰一 直井 房太郎

同 第五級

東京府管下 酒田縣管下 青森縣管下

田村 崇顯 服部 正光 東條 三郎

敦賀縣管下 山口縣管下 東京府管下

山田 董 武島 重丹 北川 俊



敦賀縣管下 置賜縣管下 東京府管下

細井 脩吾 山吉 盛光 池田 正友

同 久後 元長 鳥取縣管下 藤田 精太郎 山口 利八

長崎縣管下 村上 又造 山口縣管下 御堀 耕助

工業學豫科第四級

靜岡縣管下 廣嶋縣管下 東京府管下

和田 正幾 田口 謙吉 富谷 光孚

同 川上 新太郎 長崎縣管下 西 松次郎 東京府管下

滋賀縣管下 增島 六一郎 東京府管下 平岩 常保 熊谷縣管下

鈴藤 安六

石川縣管下 北條縣管下 三重縣管下

三宅 常倫 磯野 計 喜多村彌太郎

千葉縣管下 小田縣管下 東京府管下

二見 鏡二郎 曾良 誠太郎 大谷木備一郎

濱田縣管下 千葉縣管下 靜岡縣管下

小藤 文二郎 福島 住長 田寺 鐘一

高知縣管下 千頭 清臣

第五級

石川縣管下 靜岡縣管下 東京府管下

橘 協 蓮池 惟孝 野尻 武助

高知縣管下 坂崎 直道 靜岡縣管下 織田 顯次郎 新川縣管下

山本 謙三



静岡縣管下

肥田 密三

熊谷縣管下

高橋 一勝

滋賀縣管下

日下部勉次郎

敦賀縣管下

石田 二男雄

千葉縣管下

三省

東京府管下

坂田 貞一

千葉縣管下

秋山 源藏

佐賀縣管下

渡邊 鏝二郎

椽木縣管下

青木 元五郎

同

第六級

熊谷縣管下

山中 英

足柄縣管下

忠寬

敦賀縣管下

福島 廉平

熊谷縣管下

菅谷 正樹

同

山下 傳吉

東京府管下

服部 福松

小田縣管下

吉田 彦六郎

千葉縣管下

足立 震太郎

高知縣管下

中村 久恒

敦賀縣管下

佐々木忠次郎

東京府管下

西郷 久道

北條縣管下

宇田川 三郎

高知縣管下

黒岩四方之進

試験未済

岐阜縣管下

久米 祐吉

三重縣管下

旨重

飾磨縣管下

録郎

滋賀縣管下

田中 克己

千葉縣管下

福與 藤九郎

高知縣管下

北村 重孝

静岡縣管下

長瀧 二郎

東京府管下

門井 保定

同

大澤 論太郎

埼玉縣管下

上原 六四郎

島根縣管下

山口 宗義

小田縣管下

野本 彦一



同	寺地	左吉	石川縣管下	中村	行	東京府管下	保志	虎吉
和歌山縣管下	水野	國次郎	青森縣管下	河原	勝治	敦賀縣管下	渡邊	本太郎
東京府管下	田中	吉之助	石川縣管下	杉岡	政久	敦賀縣管下	笠原	格
山口縣管下	中村	研三	同	遠藤	兵助	東京府管下	夏目	大一
同	久保田	貞則	青森縣管下	佐々木	正			

元天文學生徒

埼玉縣管下	平野	四郎	東京府管下	佐藤	金三郎	岡山縣管下	佐分利	隆
-------	----	----	-------	----	-----	-------	-----	---

磐前縣管下	堀江	正	石川縣管下	井上	幾太郎	岡山縣管下	長尾	峯太郎
筑摩縣管下	上田	文藏	濱松縣管下	長谷川	正道	東京府管下	大塚	成吉
廣島縣管下	香川	義一	滋賀縣管下	高野瀨	宗則	東京府管下	加瀬	昶二郎
同	坂本	清房	岡山縣管下	赤木	周行	東京府管下	龜山	貞義
名東縣管下	三守	守	岐阜縣管下	吉川	俊吉	大分縣管下	保田	棟太
岡山縣管下	横井	琢磨	同	松本	収	奈良縣管下	井田	鐘三郎
愛知縣管下	橋本	胖三郎	東京府管下	信谷	定爾	石川縣管下	牛圓	競一



秋田縣管下 靜岡縣管下 奈良縣管下  
谷田部 梅吉 渡邊 知一郎 藤林 忠良

本年七月第二大學區愛知師範學校ニ於テ學力ヲ試驗シ入學ヲ許ス生徒左ノ如シ

愛知縣管下 同 同  
佐藤 雲詔 佐藤 保佑 伊勢 良量  
二十年三月 二十一年七月 二十年四月

石川縣管下 京都府管下 靜岡縣管下  
石上 退步 木崎 永正 淺井 八十郎  
二十四年五月 二十二年八月 二十四年十月

愛知縣管下 同 石川縣管下  
長谷川 亮一 日置 勝驥 木村 花實  
二十八年十月 二十一年二月 二十五年五月

石川縣管下 愛知縣管下 石川縣管下  
淺野 永秀 野村 裕 松田 信之  
二十四年一月 三十年二月 二十一年四月

石川縣管下 愛知縣管下 石川縣管下  
得田 成章 恩田 則正 森 寬治  
二十年三月 二十年二月 二十七年五月

愛知縣管下 石川縣管下 愛知縣管下  
近藤 鈴太郎 野村 肇 井出 二郎  
二十六年八月 二十年十月 二十三年

同 同 石川縣管下  
味岡 正義 柴山 準行 土師 雙他郎  
二十一年四月 二十年二月 二十年九月

愛知縣管下 同 筑摩縣管下  
高木 鈴松 田中 有文 村澤 衡平  
二十七年十月 二十二年二月 三十年十月

靜岡縣管下 三重縣管下 同  
綾部 虎關 高原 徹也 河村 忍  
二十五年十一月 二十三年 二十五年七月



静岡縣管下

大前 義治 二十年一月

敦賀縣管下

大村 滋穂 二十年九月

三重縣管下

安西 富徳 二十二年七月

愛知縣管下

中川 録次郎 二十年二月

同

駒林 瓊響 十九年五月

同

二樹 研心 二十四年九月

同

余谷 吉九郎 二十年九月

同

三輪 弘忠 十八年一月

三重縣管下

須原 武吉 二十七年六月

敦賀縣管下

三神 愿 二十六年九月

石川縣管下

深見 昌吉郎 二十年

敦賀縣管下

脇屋 氏義 二十六年六月

愛知縣管下

太田 寛 十八年七月

石川縣管下

堀 貞次郎 二十年二月

同

西田 登 二十年一月

愛知縣管下

伊藤 高秋 二十五年六月

同

勝川 資太郎 十九年九月

石川縣管下

清水 誠吾 二十年

筑摩縣管下

三井 孝政 二十四年三月

石川縣管下

堀 敷矩 二十年十一月

同

清波 義上 二十年

同

津田 政二郎 二十年三月

愛知縣管下

前田 宗一 二十一年二月

同

小川 亮 二十九年

石川縣管下

山崎 道貫 二十年九月

愛知縣管下

荒尾 久胤 二十三年一月

同

前田 鎗次郎 二十五年四月

同

伊勢 貞幹 二十四年十月

三重縣管下

上田 茂次郎 二十年八月

同

山本 三省 二十三年五月

愛知縣管下

牧 愷 二十一年四月

名東縣管下

中山 龜太郎 二十一年七月

愛知縣管下

丹羽 岩吉 二十二年十月

同

今澤 正雄 二十四年

同

原田 鉦次郎 二十二年六月

同

松永 省吾 二十四年八月



同 三重縣管下 高木 秀雄 二十一年一月 榎葉 權一郎 二十六年一月 吉川 橋造 二十三年十月

同 尾藤 德義 十八年十月 稻熊 成美 十七年八月

敦賀縣管下 齋藤 熊太郎 二十年一月 三重縣管下 近藤 安宅 二十三年十月 同 郡 又次郎 二十一年九月

愛知縣管下 伊藤 雄次郎 二十四年八月 三重縣管下 栗田 智城 二十二年 石川縣管下 田伏 德三郎 二十年五月

石川縣管下 高田 耕馬 十九年十一月 同 內藤 正木 二十年七月 木村 雄太郎 二十一年六月

同 荒木 政策 二十年一月 濱松縣管下 幕内 椿三郎 二十三年 石川縣管下 山田 尚 二十一年

同 丹羽口 了二 二十年一月 同 棚橋 正 二十年二月 同 吉村 謀惟 二十五年六月

愛知縣管下 林 金之丞 二十年 石川縣管下 青山 保命 二十年 山口縣管下 長井 登人 二十年七月

愛知縣管下 吉澤 讓 三十一年二月 同 松永 近榮 二十一年九月 同 林 直忠 二十三年七月

三重縣管下 伊原 義烈 二十年四月 筑摩縣管下 上野 道之助 二十年二月 愛知縣管下 津田 正吉郎 二十一年

同 武野 元房 二十二年四月 靜岡縣管下 大久保 忠道 二十五年五月 同 江口 輝光 二十七年六月

小倉縣管下 野口 虎二 二十三年一月 愛知縣管下 川村 直三郎 二十年 同 高木 忠恕 二十年一月



菅沼 一雄 二十年一月	同	菅沼 喜和次 十七年四月	同	菅沼 三崎 二十年一月	同	菅沼 數江 二十年一月	同
能島 武夫 二十一年一月	同	小西 錄次郎 二十年一月	同	伊藤 勇 十七年四月	同		
竹内 孝本 二十四年五月	同	篠田 啓 二十二年七月	同	戸賀 里甫 二十四年	同		
下村 隆 二十八年七月	同	深津 覺仙 二十一年二月	同	松浦 寛戒 二十七年二月	同		
若林 龍吉 二十二年三月	同	猪飼 信順 二十六年十月	同	中山 良直 二十年一月	同		
細野 半六 二十年九月	同	小川 鍵次郎 二十二年七月	同	高橋 十郎 十九年九月	同		

通計百二十名

本年七月第六大學區新潟師範學校ニ於テ學力試験ノ上入學ヲ許ス生

徒左ノ如シ

稻寸 篤恭 二十年十一月	同	石川縣管下	同	山田 申太郎 二十年	同
田中 鼎 三十四年七月	同	桑野 庸次 二十七年八月	同	大橋 淳藏 二十年二月	同
渡邊 忠次郎 二十年二月	同	花井 平藏 二十三年七月	同	竹尾 住清 二十一年九月	同
村田 盛孝 二十五年六月	同	渡邊 健太郎 二十一年七月	同	松井 深 二十四年七月	同



文部省雜誌 第十六號

總計九名



明治七年九月七日發行

今般神奈川縣病院雇米人シトシモンヌ生衛ノ法ヲ改メ醫學ヲ進ムル  
ノ方法ヲ建言ス其我カ國ニ裨益スル少カラサルヲ以テ今之ヲ左ニ譯  
載ス

方今宇内文明國ト稱スル政府ノ論スル所ヲ觀ルニ凡國ノ盛大ヲ致ス  
所以ノモノハモト人民知識ノ進メルト身體ノ壯ナルトニ由ラザルハ  
ナシ夫レ人民知識進メハ則其主宰トナリ及裁判司タルモノモ亦從テ  
善良且明敏ナルヘシ身體壯ナレハ則其軍旅モ亦從テ強勁勇敢内ハ以  
テ能ク邦國ヲ鎮壓シ外ハ以テ能ク寇敵ヲ威服スヘク其農夫モ亦從テ



強健勉勵耕耘ニ精ク以テ能ク富國ノ基ヲ開クヘシ

故ニ善政府八年ニ益注意ノ教育ヲ旺盛ナラシメンコトヲ謀リ且各般ノ規律ヲ制立ノ之ヲ嚴守セシメ以テ人民ヲノ疾病ノ患ナク從テ身體ノ強健ヲ得セシメンコトヲ務メサルハ無シ

各國ノ論スル所委ク同一條理ニシテ上ニ陳說セル所ノ外ニ出スト雖モ其之ヲ實際ニ施スニ至テハ國各其宜キアリ漫ニ同一ノ方法ヲ以テスルヲ得ス蓋此國ニ施シテ能ク其功ヲ奏スルノ方法モ之ヲ彼國ニ施セハ則其奏功ヲ望ムヘカラサルモノアリ

今日本ニ於テ一種ノ方法ヲ制立ノ醫學科ノ如キ專門ノ教育ヲ旺盛ナラシメ或ハ衛生ノ方法ヲ改正セント欲スル先ツ熟考セサルヘカラサルモノ少トセス今他國ノ成規ヲ取テ直ニ之ヲ遵用スルハ管々益ナキ

ノミナラス思ハサルノ甚キナリ必先此國ノ形勢ト人民ノ情態トヲ考ヘ之ヲ斟酌セサル可ラス且日本ハ舊國ナレモ猶新國ト謂ハサルヲ得ス故ニ醫學ヲ講習スルモ亦論理ヨリ始ムルヲ要セス畢竟高尚ノ學科ヲ要スルコト甚少トス是レ皆多ク年月ヲ費スニ非レハ成ル能ハサル者ニノ乃舊國ノ爲ス所新國ノ爲スヲ得ル所ニ非ス方今醫學ノ進歩ヲ要スルコト迅速ナルノ時ニシテ而シテ此ノ如キ曠遠ノ成功ヲ俟ツハ日本ノ能クセサル所ナリ

各種ノ教育及ヒ改正ノ方法ハ總テ簡易ニシテ實際ニ行ハルヘカラシムルヲ要ス否サレハ則教育ヲノ普及ナラシムルコト能ハス是レ醫科ノ教育ニ於テ殊ニ然リトス今政府ニ於テ一ニ大學校ヲ設立シ外國語ヲ以テ醫學ヲ講究セシムルハ理ニ於テ固ヨリ當レリトス然レモ獨此校



ヲ以テ普ク將來ノ人民ニ裨益シ得ヘキニ非ス且方今實地内外ノ二科  
ヲ教フルニハ日本語及支那語ヲ用井テ足レリトス是レ則將來永ク用  
井サル可カラザル者ニノ普ク人民ニ裨益スルヲ得ヘシ今其方法ヲ條  
陳スルヲ左ノ如シ

衛生法改革及醫學進步ノ方法案

第一項 衛生法改革

第一章

衛生事務掛ト稱スル一局ヲ設立スヘシ

第二章

第一 東京ニ本局ヲ置キ假ニ之ヲ文部省ノ支局トスヘシ

第二 各縣ニ分局一所ヲ設クヘシ

第三 各縣ノ分局ハ凡本局ニ於テ處分スヘキ事件ヲ除クノ外之ヲ處  
置スルノ權アルベシ

第三章 職員ノ學力及任職ノ事

學力

第一 本局ノ職員及分局ノ長副長ハ盡ク下クトル、ヲフ、メダス醫學博士  
義ノナルヲ要ス

第二 本局ノ職員及ヒ分局ノ長ハ盡ク英佛蘭或ハ日耳曼語ヲ以テ十  
分ニ内科ノ試験ニ當ルヘキ學力アルモノヲ要ス

任職

第一 本局ノ職員ハ盡ク文部省ニ於テ之ヲ命スヘシ

第二 分局ノ職員ハ其縣内ニ於テ外國ノ醫術ヲ適用スルモノ、舉薦



ヲ以テ文部省ヨリ之ヲ命スヘシニ依リテ

第四章 衛生事務局保護ノ法

衛生事務局保護ノ資金ヲ集ムルコト左ノ如シ

第一 又ピリ<sup>燒酎ノ類</sup>止<sup>ヲ謂フ</sup>賣捌准許稅

第二 煙草賣捌准許稅

第三 賣婦准許稅

縣廳ハ其縣ノ衛生局ヲ經テ此准許ヲ乞フモノヲ許シ且其税金ヲ以テ局費ニ供スルノ權アルヘシ然レモ其稅額ノ幾<sup>一割ヲ過ク</sup>ハ之ヲ本局ニ納ムヘシ

第五章 衛生事務局通常ノ目的

衛生事務局ノ通常目的トスル所ハ人民ノ生命ト健康トヲ保護シ且疾

病ノ傳染スルヲ防クニアリ

第六章 衛生事務局殊別ノ目的

第一 衛生事務局ノ殊ニ目的トスル所ハ船舶ニ由テ他國ヨリ傳染病ノ來ルヲ防クニアリ故ニ各船入港ノ時其船中傳染病アルキハ則傳染病預防ノ規則ヲ施シ以テ之ヲ防クヘシ

今日本ト外國トノ間ニ特別ノ交際ヲ存スルヲ以テ傳染病預防ノ如キモ亦特別ノ規則ヲ設クヘシ此ハ則東京本局ノ責任トス

第二 衛生ノ規則ヲ以テ都府或ハ内國一般ニ傳染病ノ流行スルヲ防クヘシ

第三 種痘ヲ督促スベシ

第四 賣婦ノ簿籍ヲ詳明シ且定日ヲ設ケテ徵毒ヲ検査スヘシ



第五 無費病院及ヒ貧民ノ爲ニ施藥局ヲ置キ第四章ニ記載セル准許  
稅ヲ以テ之ヲ保護スヘシ

第六 醫學師範學校ヲ設立シ且之ヲ管理スルノ法ヲ設クヘシ

第七 藥劑ヲ検査スヘシ

第八 食物ノ肆店及飲水ノ淵源ヲ検査スヘシ

第九 人民ノ生死ヲ録スヘシ

第十 牛豚等屠殺ノ場所及健康ヲ害シ生命ヲ危フスルノ産業ヲ督察  
スヘシ

第十一 糞穢掃除ノコヲ督察スヘシ

第十二 衛生ノ爲臨時市街掃除ノコヲ督察スヘシ

第十三 石炭油及其他燃焼シ易クシテ危害ヲ醸スベキ物品ヲ検査ス

ベシ

第十四 ヌピリッ卜様ノ飲料茶及ヒ種々ノ水藥ヲ検査スベシ

### 第二項 醫學進歩

#### 第一章

第一 文部省ニ於テ翻譯及出版ノ藥劑書及治療ノ小冊子ハ總テ原價  
ヲ以テ之ヲ醫家ニ賣與スベシ

第二 内外二科學術ノ書籍ハ之ヲ翻譯及ヒ出版シ原價ヲ以テ之ヲ賣  
ルベシ但此書ハ小冊子ニメ内外二科ノ最實際上ニ於テ緊要ナル箇條  
ヲ記載スルヲ要ス

#### 第二章

縣廳或ハ其縣ノ衛生督務ハ其縣内ニ於テ疾ヲ療スルモノアレハ其療



法何如ヲ問ハス必之ヲ督促シテ毎年其縣内ノ衛生局ニ出テ許可ヲ受ケシムヘシ但少許ノ税金ヲ出サシムルヲ要ス

第二 此規則ヲ犯スモノハ罰金ヲ命スヘシ

第三 藥劑書出版ノ時左ノ布告ヲ出スヘシ(文部省藥劑書出版ノ後チ一年ヲ經テ其書中掲載ノ件々十分ノ試験ヲ受ルコト能ハサル者ハ醫師ト稱シ實際上外國ノ藥品ヲ用ルヲ許サス)此布告ヲ犯スモノハ罰金ヲ命スベシ

第四 能ク此試験ニ中ル者ハ證書或ハ特別ノ免許ヲ與ヘ支那ノ藥劑ト西洋ノ藥劑トヲ並用セシムベシ

### 第三章

上章ノ准許稅ヲ聚積シ之ヲ縣内醫學進歩ノ資金ト稱スヘシ

凡縣内ノ醫師ハ衛生局コレヲ從憲シテ醫學社中ヲ結ヒ縣内醫學ノ進歩ヲ謀ランメ且醫學校資金ノ出納ヲ司トラシムヘシ

### 第四章 醫學師範學校設立ノ目的及ヒ方法

内外二科ヲ教授スルノ法ハ講讀ヲ以テスルヲ最モ善トス

此法ニ依レハ解剖學生理學等専門ノ學科ハ皆課ヲ設ケテ之ヲ講シ且圖書器械ヲ用井之ヲ解シ易カラシム

此諸科ノ講讀ヲ總稱ノ講讀ノ課程ト名ク而ノ通常一講讀ノ期限ハ三四ヶ月トス

日本ニ於テ醫學師範學校ノ目的トスル所ハ上ニ記載セル法ニ從テ内外二科ノ教師ヲ陶成スルニアリ

此講讀ノ總課程ヲ授クル教官ヲ總稱シテ講讀教員ト名ク



方今ニ在テハ此教員ヲ置クニ左ノ規制ヲ以テスベシ

第一 講讀教員ハ正副六名ヲ以テス即チ正教官三名副教官三名

第二 講讀ノ學科ハ解剖學生理學藥劑學眼科及實地内科是ナリ

第三 正教官ハ專門二科ヲ授ク

第四 副教官モ亦同ノ徽毒眼病耳病及ヒ化學等ノ學科ヲ授クヘシ且

正教官ノ講讀ヲ説明シ及正教官一時病ニ罹ル時ハ之ニ代リテ講讀区

師範學校ヘ入校ノ後一年ヲ經テ講讀教員トナラント欲スル者ハ先ツ

自ラ試験ヲ授クヘキ學科ヲ温習シ然ル后二科ノ試験ヲ受ク試験十分

ナレハ則學校ヨリ金幾圓ノ褒賞ヲ與ヘ且一月給料幾圓ヲ以テ幾年間

之ヲ雇フヘキ條約ヲ爲スヘシ

講讀教員學力

講讀教員トナラント欲スル者ハ必能ク英佛蘭或ハ日耳曼語ノ内科書ヲ讀ミ得ヘキ學力アル者ヲ要ス

講讀教員職掌

講讀教員ノ職掌ハ國內各所ニ於テ講讀スルニ在リ其一講讀ノ期限ハ三ヶ月トス其法下章ニ示ス如シ

第五章

某地ニ講讀教員ヲ差遣セント欲セハ先第三章ニ記載セル醫學校資金ヲ以テ講讀場ヲ設ク講讀教員ノ費用モ亦此資金ヲ以テ支給スヘシ講義ヲ聽カント欲スルモノハ一科ニ切手一枚ヲ受ルヲ要ス譬ハ解剖學等ノ一科ヲ聽カント欲セハ先切手一枚ヲ受ケ其直ヲ拂フヘシ此金ハ之ヲ聚積シ講讀教員費用ノ不足ヲ補フニ供ス而シテ猶足ラサル



其ハ文部省ヨリ之ヲ補フヘシ

第六章

藥劑書及第二項第一章ニ記載セル實地内外二科ノ書類ヲ翻譯出版スルニハ必ス注意セサルヘカラス今何レノ國ノ書トイヘモ之ヲ直譯シテ直チニ今日ノ實用ニ供セント欲スルハ得ヘカラサルコナレハ更ニ普通ノ書籍ニ就テ其實際ニ適スヘキ者ヲ採擇シ簡約ニ之ヲ編纂スヘシ

第七章

第一 東京大坂西京ノ如キ都會ニ於テハ其地ノ病院ニ日本語ヲ以テ教授スル醫學校ヲ合設シ前ニ記載セル法ニ依リ毎年六ヶ月間ノ講讀ヲ開クヘシ

第二 試驗ノ優劣ニ從テ下クト<sup>此</sup>師<sup>醫</sup>ノ等級ヲ定ムヘシ

第二 等級ハ之ヲ三等ニ區別シ文部省ノ検査官<sup>検査官ノ條ヨリ之ヲ</sup>授<sup>ニ詳ナリ</sup>

第一等 此級ハ東京官立醫學校ニ於テ定ムル處ノ課程ヲ卒業セル者ニ與フ

第二等 此級ハ英佛蘭或ハ日耳曼語ノ内外二科ノ書ヲ讀ミ得且實地ノ試驗ヲ經シ者ニ與フ

第三等 此級ハ翻譯ノ藥劑書及ヒ内外二科ノ書ニ就テ十分ノ試験ヲ經且日本語ヲ以テ教授スル醫學校ノ講讀ニ全二回關席ナキ者ニ與フ

検査官



文部省ニ於テ検査官二等ヲ命スルヲ善トス則チ左ノ如シ

一等検査官

第一 常ニ東京ノ本局ニ在テ講讀教員ニ任スヘキ醫師ノ學力ヲ検査シテ其優劣ヲ判ス且此講讀教員ヲ養成スル師範學校ノ長タルヘシ

第二 第一項第二章ニ記載セル各縣衛生分局長ノ學力ヲ検査シ其優劣ヲ判シ且二等検査官ヲ命スヘシ

二等検査官

第一 毎年一次定期ヲ以テ各縣ヲ巡迴シ衛生分局ノ事務ヲ監督スヘシ

第二 各縣ノ病院及ヒ施藥局ヲ巡迴シ其醫學校アルノ地ハ亦之ヲ視察スヘシ

第三 第二等第三等下ノトナラント欲スル者ヲ検査シテ其等級ヲ與フヘシ

第四 歳終毎ニ以上ノ件々ニ就テ處分スル所ヲ書記シ之ヲ文部省ニ申報スヘシ

余以爲ラク此ニ陳說セル方法ハ毫モ官立醫學校ノ妨ケヲ爲スコナク却テ全國ノ醫學ヲ獎勵シ之カ爲ニ官立醫學校ノ隆盛ヲ致シ大ニ生徒ヲ增多スヘシ

○賣婦及黴毒院傳染豫防ノ方法

凡ソ醫其術ニ熟セサルヲ以テ黴毒ヲ療スルコト能ハス或ハ政府善ク黴毒傳染ヲ防クノ方法ヲ設ケサルキハ其人民ニ害アルコト之ヨリ大ナルハナシ



此惡疾ハモト父母ヨリ其子ニ傳ヘ或ハ之ヲ夭死セシメ或ハ生命ヲ保ツモ身心虛弱ニシテ一生ヲ不幸ニ終ルヘシ苟モ善ク此ニ注意セサレハ闔族之カ爲ニ死亡スルニ至ラン

此病ノ傳染ヲ防カント欲スル嚴法ヲ設クルニ如クハナシ歐州ノ諸國一夫ノ外交通スル者ハ盡ク之ヲ賣婦ト名ク日本ノ法ニ依ルキハ特ニ金錢ヲ以テスルモノヲ賣婦ト稱スルカ故ニ黴毒傳染豫防ノ方法ヲ設テ之ヲ制スルト雖モ獨金錢ニ因テ賣淫スル者ニ及フノミナレハ到底賣淫ノ輩半ハ唱テ金錢ニ因ラスト言ン然ルキハ強テ之ヲ病院等ニ送り其黴毒ヲ療スルコト能ハス假令自ラ病ニ嬰ルモ尙淫ヲ賣ルヲ以テ自然之ヲ傳染スルコト甚キニ至ルヘシ

故ニ此從來ノ法ヲ變革シテ左ノ規則ヲ用ヰンコトヲ要ス

第一 金錢ノ有無ヲ問ハス猥リニ交通スル者ハ總テ法律ニ依テ賣婦トス

第二 賣婦ハ總テ其役所ニ出テ賣婦ノ簿籍ニ姓名ヲ記シ准許稅ヲ出シ鑑札ヲ受クヘシ官他日之ヲ點檢スルノ時ニ當リ必此鑑札ヲ示サ、ルヘカラス

第三 賣婦ノ籍ニ入ル者ハ六日一次檢査場ニ赴キ醫師ノ檢査ヲ受クヘシ然ル後醫師鑑札面ニ其黴毒アルト否サルトヲ證書シ或ハ證印スヘシ

第四 若鑑札面ニ醫師ノ證印無キモノ黴毒ノ患ナク且六日內ニ其檢査ヲ經シコトヲ證明スル能ハサルキハ則捕縛シテ入牢セシメ或ハ之ヲ罰スヘシ



第五 賣婦ヨリ徴毒ヲ受ケシ者ハ之ヲ官ニ訴ヘ官爲ニ之ヲ裁スヘシ  
 而メ其賣婦若シ鑑札ニ據テ六日內ニ檢査ヲ經シコヲ證スルコト能ハサ  
 ルキハ之ヲ罰スヘシ婦女徴毒院ニ入り治療ヲ受ケンコトヲ乞フ者ハ全  
 治ニ至ルマテ院費ヲ以テ之ヲ療スヘシ

第六 徴毒院ハ總テ徴毒ヲ受ケシ婦女ヲメ入院セシムヘシ且其入費  
 ハ賣婦准許稅ヲ以テ之ニ充ツ

文部省雜誌第十七號



文部省雜誌第十七號

文部省雜誌第十七號

明治七年十月三日發行

病客ノ箱根熱海ニ輻湊スルモノ年一年ヨリ多ク沈痾痼疾ノ治癒ヲ  
 得ルモノ勝テ數フヘカラス然レモ既ニ其効アル又從テ害ナキヲ能  
 ハス妄浴漫用其効害ヲ審カニセスノ遂ニ險症篤疾ニ陷ルモノ數シ  
 トセス故ニ鑛泉浴ニ就クモノハ必ス醫師ノ診察ヲ請ヒ用法攝生ノ  
 示教ヲ受ヘキハ勿論醫師モ亦能ク鑛泉ノ成分ヲ詳カニシ其効害ヲ  
 判スヘキニ頑症難治ノ病客ハ概シテ之ヲ鑛泉ニ托スルノ弊ナキニ  
 アラス肺結核心病等ノ患者醫師ノ示教ニ由テ鑛泉ニ浴シ大ニ病勢ノ進惡シタルモノアリト云フ因テ今石井信  
 義譯スル所ノ丹涅兒鑛泉畧說ヲ公ニシ其効用禁忌ヲ知ルノ一助ト



ナサントス篇中論スル所ノ者ハ專ラ外國ノ鑛泉ニ係ルト雖モ其用法等ニ至リテハ彼我固ヨリ大逕庭ナカルベシ且本邦各地ノ鑛泉ハ現今獨乙ノ化學家ヨルチ氏ニ附シテ試驗セリ其性分及ヒ功能ハ不日刊行アルヘシ

丹氏鑛泉畧說

石井信義譯

鑛泉ハ諸種ノ鹽類及ヒ諸般ノ瓦斯ヲ夾雜セル一種ノ藥劑ナリ其含蓄セル諸質分ハ大率其流過セル所ノ土壤若クハ岩石中ヨリ出ル者ニシテ殊ニ<sup>コロレシオン</sup>曹胃母<sup>ザウム</sup>硫酸曹達<sup>グロモウム</sup>碳酸曹達<sup>ハレ</sup>硫酸麻佃涅失<sup>キチ</sup>碳酸麻佃涅失<sup>瓦斯</sup>加爾基鹽<sup>硫酸</sup>碳酸鉄<sup>水素</sup>磷酸<sup>瓦</sup>密謨<sup>斯</sup>沃顛<sup>酸</sup>有機物質<sup>酸</sup>及ヒ多少ノ遊離瓦斯<sup>酸</sup>ニ關スルニ其温度ハ大約沸騰點ヨリ下ルヲ常トス只アイラン止ノ温泉

ノミハ華氏ノ二百十二度ナリ

鑛泉ハ内外共ニ之ヲ供用ス其功能ハ血液ヲ稀釋淨刷シ分泌排泄ノ二機ヲ奨進ノ體內ノ病毒ヲ驅逐シ兼テ皮膚及ヒ腹内ノ血行ヲ進運ス蓋鑛泉ノ病ニ功アルハ其所含ノ化機物質及ヒ其温度ニ關係スト雖モ其風土氣候ノ異ナルト本人ノ靜閑無事ニシテ思慮ノ經營ヲ忘ル、ト食養ノ淡泊ナルト將タ一切攝生ノ宜シキトモ亦大ニ其功ヲ助クルモノトス

其適應スル症ハ只甚シキ器質ノ損壞ナキ慢性病ノミ故ニ夫ノ<sup>温</sup>如キハ大抵皮膚病<sup>泉</sup>腺病及ヒ他ノ頑固ノ潰瘍<sup>温</sup>經久ノ挫傷等ニ由ル肢節強硬<sup>温</sup>慢性病風<sup>泉</sup>癱瘓質<sup>温</sup>膀痛<sup>泉</sup>神經痛<sup>温</sup>胃肝若クハ腎ノ機能變常<sup>泉</sup>腸殊ニ結腸直腸ノ運營遲慢<sup>温</sup>急性症去リテ後ノ痲痺<sup>泉</sup>依卜昆垓兒<sup>温</sup>歇私底里<sup>泉</sup>



機能ノ變常ニ功アリ然レモ急症結核病、癰腫、貴要部ノ脂樣變質、動脈腫、  
 心臟或ハ大血管ノ諸病ニハ果ノ害アリ殊ニ腦肺胃若クハ腸ノ出血ノ  
 素因アル者ニハ宜シカラス入浴ハ特ニ然リ其他小兒老人ニハ功微ナ  
 ク或ハ全ク功ナシ妊婦モ亦假令之ヲ用井ルモ切ニ謹誡ヲ加ヘンヲ  
 要ス

又バニ滯留ノ時間ハ第五月ノ初ヨリ大約第九月ノ終リニ至ルヘシ然  
 レモ外國ノ藥泉場ニ在テハ纔ニ第六月ヨリ第八月ノ終リニ至ルヘキ  
 モノヲ多シトス又稀レニハ冬時ノ間淹留スヘキモノアリ痛風患者ハ殊ニ然リ  
 然レモ之ヲ要スルニ鑛泉ノ療養ハ六週若クハ八週ヲ超ユヘカラス大  
 抵三週又ハ四週ニシテ足ルヘシ患者此療法ヲ行フモ之ニ由テ速ニ輕  
 快ヲ得ルト思フヘカラス又鑛泉ノ功否ハ其服用スル分量ノ多少ニ關

カルト云ヘル俗説ヲ信スヘカラス又所謂分利ノ皮疹溫泉疹及ヒ分利  
 ノ下利モ亦必シモ治病ノ爲ニ喫緊ノ機轉ト看做スヘカラス凡ソ鑛泉  
 療法ノ範則トスヘキハ浴澡ト内服ト同日ニ始ムヘカラス内服ノ如キ  
 ハ最初ハ少量ヲ用井ヘシ即チ朝食前尋常ノ麥酒盞二杯若クハ三杯晚  
 ニ又一杯若クハ二杯ヲ用ルヲ良トス如此ノ暫ラク時日ヲ經ル後ハ晝  
 食前ニモ亦一杯ヲ用井テ可ナリ凡テ之ヲ用ルニハ熱微温ノモノヲ服  
 スヘシ熱セルモノ冷カナルモノハ不可ナリトス  
 患者力メテ毎朝早起大約午前六時シ朝食前空心ニ一回ノ量即チ一杯若クハ二杯  
 スヘシ凡ソ鑛泉ヲ内服スルニハ須ラク徐々ニ之ヲ嚥下スヘシ決メ吐  
 藥ノ如ク頓服スル勿レ且ツ一杯ヲ服スル毎ニ少クモ十五分時ヲ間タ  
 テ其時間ハ少シ歩行シ然ル後更ニ一杯ヲ服スルヲ法トス服後一時ヲ



經テ朝食ニ就キ食後緩歩逍遙ノ入浴シ其後適宜ニ讀書寫字等ヲ爲シ  
 テ晝食ノ時ニ至ルヘシ晝食ニハ果物及ヒ未熟ノ蔬菜ヲ禁シ輕淡ノ葡  
 萄酒若クハ苦味微ナキ麥酒少許ヲ兼用スルニ宜シ食後ハ心神ヲ安逸  
 ニシ隣客ト交ハルモ其委曲ニ與リテ勞思セス只安恬相樂テ消暑スヘ  
 シ鑛泉ハ一杯若クハ二杯ヲ服シ然レモ早且ニ服用スル分量ノ半ヲ過ク可ラス午後八時淡薄  
 ノ晚餐ヲ喫シ其後二時間ヲ經テ寢ニ就クヘシ是ヲ一日中ノ行事トス  
 譯者曰ク浴湯ノ温度ハ華氏驗温管ノ九十二度ヨリ九十八度ニ至ル  
 ヘシ本邦ノ人ハ大概熱湯ヲ好ムカ故ニ切ニ注意ノ其度ヲ超ユヘカ  
 ラス又湯坪ハ毎夕清潔ニ掃除シ少シモ脂垢ヲ留ルコトナカレ畢竟脂  
 垢ハ汗物ナリ世俗湯坪ノ濁レルヲ貴ヒ數日之ヲ掃除セサルモノ多  
 シ大ナル誤リト謂フヘシ抑溫泉ノ功ヲ奏スルハ其清淨純潔ナルニ

在リ何ソ汗物ヲ貯ヘテヨシトスルノ理アラシヤ故ニ余特ニ熱海ニ

於テハ客舎ノ主人ニ説諭シ毎夕之ヲ掃除セシム

鑛泉ヲ分テ冷温ノ二種トス然レモ其所含ノ成分ニ隨テ之ヲ鐵泉、硫泉、

瓦斯泉即チ含酸泉、沃巔ヨチウム、蒲魯密プロミウム、誤泉及ヒ咯唎利コホルリシニア亞泉ニ別ツヲ以テ治

術ニ益アリトス

第一種 鐵泉 諸般ノ鑛泉中少量ノ鉄分ヲ含マサル者ハ鮮ナシ然

レモ其量顯著ナラサル者ハ鐵泉ノ名ヲ命スルコトナシ含酸鐵泉 多量ノ炭酸瓦斯者

斯ヲ含ノ最タル者ハシリワルバヒ、スビ、ヒロ、モシトアリニケナウ泉ノ名モ

ルテンハムノカムブライ及ヒタンブリッヤ泉是ナリ又鹽性含酸鐵泉及鐵

曹達及ヒ咯唎曹胃母ヲ含ム者ニハフランセンスバットボッグレット及ヒ

ハルロゲート等ニアル者ヲ以テ著名トス凡テ鐵泉ハ乏血病及ヒ生殖



器ノ機能變常スル者ニ効アリ

第二種 硫泉

硫化水素ヲ含ムヲ以テ敗卵臭アリ温硫泉ノ

最タル者ハアイキスラヤペルニアリ其他維也那近傍ノ温泉アイキス

レスベインズ「バレゲス」リユホヒノ「バクチレス」シントサウヘウル「カウテ

レツ」オウキスホン子ス及ヒ「オウキス」シャウテスノ如キ是ナリ本邦箱根

ノ湯モ亦此類ナルヘシ凡ソ硫泉其熱度愈高キ者ハ神經脉管及ヒ皮

膚ヲ衝動スルノ力愈多シト知ルヘシ○冷硫泉ノ中ニ就テハ「ハロゲー

止及ヒ「ボックレツ」ヲ良トス凡テ硫泉ハ皮膚肝臟及ヒ子宮ノ病、僂麻質、痛

風神經痛及經年ノ全身標毒ニ用ユ又慢性ノ汞毒鉛毒及ヒ銅毒ニ之ヲ

用レハ能ク排毒ノ機轉ヲ助シ又意フニ硫泉ヲ用ルルハ肺及ヒ皮膚ヨ

リ發泄スル炭酸ト腎臟ヨリ排除スル尿素トノ分量大ニ増進スルナル

ヘシ

第三種 瓦斯泉即チ含酸泉 此泉ハ炭酸瓦斯ヲ含ムカ故ニ酸味強

クシテ且水面常ニ燦爛ノ光アリ「イシ」ノ温泉ト「ハツシ」ゲ「ヒ」リ

「シ」ノ冷泉ト「フ」其最トス之ヲ服スレハ心氣爽然トノ快活ヲ覺フ不消化

病肝臟病痛風及ヒ僂麻質等ニ奇驗アリ

第四種 鹽泉 鹽泉ノ中ニ就テ之ヲ服スレハ下利シ且其殊成分ニ

硫酸曹達若クハ硫酸麻偲涅失亞ヲ含ム者ハ「エ」ブ「ソ」ム「シ」ル「テ」ン「ハ」ム「シ」

「ミ」ント「ヒ」イ「ド」リ「ツ」「テ」ル「ナ」カ「ル」ハ「ス」バ「ツ」止及ヒ「マ」リ「イ」ン「バ」ツ止是ナリ此

諸泉ハ常習便秘肝臟及ヒ服内諸臟ノ運營怠慢慢性僂麻質勝痛ニ良ナ

リ又尿管ノ病ニモ効アルヘシ「カル」ハ「ス」バ「ツ」トハ殊ニ然リ又多ク咯唾曹胃母ヲ含ム

所ノ鹽泉ハ「カ」ース「バ」ッ「デ」ン「バ」ー「デ」ン「バ」ー「デ」ン「ホ」ム「ブ」ル「ビ」「キ」ッ「シ」ン「ゲ」ン「等



ナリ伊豆熱海ノ大湯此諸泉ハ腺病、癩麻質、心思過勞ヨリ起ル不消化病  
 及ヒ腸機不順ノ症ニ長シ其他ハ「ス」及ヒ「バクスト」<sub>レ</sub>ノ温泉ニハ過多ノ  
 硫酸加爾基若クハ炭酸加爾基或ハ兩物共ヲ含ミ「エム」<sub>レ</sub>及ヒ「テブリ」<sub>ツ</sub>  
 等ノ温鹽泉ニハ炭酸曹達若クハ重炭酸曹達ヲ多シトス  
 第五種 沃顛蒲魯密謨泉 最有名ノ者ハ「レウツナ」<sub>レ</sub>ノ鑛泉ナリ  
 英國ニテハ「ドハルス」<sub>レ</sub>ヲ以テ同種ノ泉トシ諸種ノ腺病、慢性ノ皮病  
 子宮ノ瘤腫及ヒ經久頑固ノ梅毒ニ功アリ  
 第六種 略味利悉亞泉 「バーデン」<sub>レ</sub>ノ鑛泉中此利悉亞鹽ヲ  
 含蓄スル者アリ痛風及ヒ尿酸過釀ノ素質ヲ根治スルニ妙ナリ

文部省雜誌第十八號



明治七年十月五日發行

今般第一大學區東京開成學校御雇米人「グリフィス」女學校御雇米人「グリフィス」師範學校御雇米人「スコット」醫學校御雇字人「ミユルラル」ホケマン満期雇止ニ因テ賛辭及ヒ賞與ノ物品並ニ開成學校御雇佛人「マイ」病死ニ因テ金ヲ贈リ追賛スルヲ左ノ如シ  
貴下ノ東京開成學校教授ニ任スルヤ已ニ久シ今満期解約ニ至リ茲ニ讚辭ヲ陳シテ以テ貴下ノ功ヲ表セントス貴下ノ職ヲ奉スルヤ勵精努力殊ニ化學ノ一科ヲ創設スルニ於テ貴下之レカ緒ヲ開キ授業ノ方法宜キヲ得テ生徒ノ進歩最速ナリ以テ貴下ノ勤勞小ナラサルヲ見ル可



シ因テ讚賞ノ證トシテ聊カ物品ヲ呈ス貴下其之ヲ領収セヨ

明治七年七月十五日

文部少輔田中不二磨

ダブリユー、イー、クリフィス君

貴所

目錄

一 蔣繪簞笥

一箇

一 白純子

一卷

東京女學校教師ノ任ヲ以テ貴所ニ託スルヲ茲ニ日アリ今定約ノ期將ニ滿タントス是ニ於テ僕當省ニ代ツテ貴所品行ノ高キ才藝ノ優ナルヲ表セント欲ス蓋シ貴所ノ職ニ任スルヤ其初ニ艱苦ナリシモ能ク之

ヲ尽スニ當テ遂ニ生徒ノ敬愛ト官吏ノ信用トヲ得ルニ至リシハ單ニ貴所ノ勉力ニ依ル處ナリ而シテ此校教育進步ノ爲メ誠實ニ誘掖セラレシハ後來婦女教育ヲ以テ心トスル者ノ感荷ニ堪ヘサル所ナリ因テ貴所ノ功ヲ讚賞スルノ證トシテ聊カ別紙ノ品ヲ呈ス伏テ領収ヲ乞フ  
明治七年七月十五日  
文部少輔田中不二磨

エム、グリフィス婦

貴所

目錄

一 金五拾圓

貴所東京師範學校教頭奉職中勉勵ノ効小ナラサルヲ以テ今滿期解約



ニ至リ當省ヨリ一讚辭ヲ呈セントス夫レ師範學校ノ當時ニ設立セシヤ恰モ貴所雇入ノ時ニ方リ則我國始テ着手セシ所ノモノナリ然ルニ此校ノ創業遂ニ今日ノ結果ヲ得ルニ至リシハ多ク貴所ノ巧熟ナル盡力ニ依ル所ナリ而シテ貴所ノ緒ヲ開キタル授業ノ方法ヲ以テ將來我國教育ノ進歩ヲ助クヘキハ實ニ我輩ノ信スル所ナリ因テ貴所奉仕中誠實ヲ尽シ且能ク其職ニ適セシヲ讚賞スルノ證トシテ聊カ別紙ノ品ヲ呈ス貴所希クハ之ヲ領收セヨ

明治七年八月八日

文部少輔田中不二磨

品數

- 一 金高料紙箱 一箇
- 一 蔴繪 一箇
- 一 同紙臺 一箇
- 一 白縮緬 一匹
- 以上

予等貴國ノ人「スタニスラ、グザビエ、マイ」君ノ訃ヲ聞キ甚悲歎セリ「マイ」君我國ノ爲メ奉仕勉勵スルヤ爰ニ四年開成學校ニアリ物理學化學ノ二科並博物學ヲ教授スル上等教授ノ職員タリ特ニ「マイ」君ノ品行ノ正實ナルト學識ノ深妙ナルトニ依リ「マイ」君ノ同僚及ヒ生徒ヨリ當省並學校ノ官吏ニ至ルマテ平生「マイ」君ヲ敬遇シタリ予貴下ノ厚誼ナルヲ信シ我國政府痛惜ノ意ヲ「マイ」君ノ親戚朋友佛國ニアル



モノニ通センコトヲ貴下ニ託ス又當省ヨリ「マイヨ」君ノ病死ヲ追悼シ「マ  
イヨ」君ノ功績ヲ追賛スルノ證トシテ日本貨三百五拾圓ヲ贈リ葬儀ノ  
費ヲ補ハント欲ス請フ貴下コレヲ彼家ニ送致セラレンコトヲ

大日本國

明治七年八月十八日

開成學校長島山義成

文部少輔田中不二磨

佛國領事ヲ、ユロー君

貴下

各通

兩國政府間懇到ノ商議アリテ貴君ノ當省ニ勉勵スルヤ爰二年アリ然  
ルニ今貴君結約ノ期既ニ滿テリ是ニ於テ我政府予ヲシテ貴君ノ我國

ノ爲メ醫學創業之ヲ盛旺ナラシメント盡力セラレテ從來貴君在職  
ノ貴重ナリシヲ謝セシメントス蓋シ貴君勉力ノ偉益タルヤ將來我國  
醫學ノ進歩ヲ以テ永ク知ラルヘキハ我輩ノ毫モ疑ヲ容レサル所ナリ  
因テ茲ニ貴君ノ品行及ヒ功績ヲ讚賞スルノ證トシテ予ニ命シ別紙ノ  
物品ヲ送呈セシム請フ領收ヲ垂レンコトヲ

貴君ノ辱友

明治七年八月

文部少輔田中不二磨

字漏士國

陸軍一等軍醫正博士ミユルラル君貴下

字漏士國

海軍醫正博士

ホフマン 君貴下



文部省雜誌 第十九號

目錄

- 一 鳩丸太力
- 一 本金錦
- 一 硯箱
- 一 料紙箱
- 以上

- 一 振
- 二 卷
- 一 筒
- 一 筒



文部省雜誌第十九號

明治七年十月廿日發行

各國學校統計畧表

佛蘭西國

○大學

八十三校

生徒

一萬八千四百四十八名

歲入

三百五十九萬七千五百二十九フランク(我七十  
一萬九千五百〇五圓八十錢)

內譯不詳

歲出

三百七十七萬八千三百七十三フランク三十五  
サンチーム(我七十五萬五千六百七十四圓六十  
七錢)



内

大學校長給料

三十二萬三千七百九十四フランク四十五サ  
チ一ム(我六萬四千七百五十八圓八十九錢)

大督學給料

五十萬〇千九百六十二フランク二十四サ  
一ム(我十萬〇〇三百九十二圓四十四錢八厘)

書記官給料

四萬九千九百八十三フランク四十八サ  
一ム(我九千九百八十三圓二十九錢六厘)

事務官員給料

六萬二千六百六十八フランク二十六サ  
一ム(我一萬二千五百三十三圓六十五錢二厘)

督務官員給料

十三萬六千七百五十四フランク三十五サ  
一ム(我二萬七千三百五十圓〇八十七錢)

校長役所入費

五萬〇四百五十四フランク(我一萬〇九  
十圓八十錢)

巡回旅費

七萬六千四百四十四フランク四十二サ  
一ム(我一萬五千二百八十八圓八十八錢四厘)

計百二十萬〇千九百九十八圓八十四錢

内譯不詳分二百五十七萬六千三百七十九フランク十五サ  
一ム(我五十一萬五千二百七十五圓八十三錢)

○小學

九萬九千二百三十六校

内公立

六萬六千五百〇四校  
三萬二千六百三十二校

生徒

四百三十三萬六千三百六十八名

公立小學歲入

四千二百九十九萬六千三百十フランク六十一  
サ一ム(我八百五十九萬九千二百六十二圓

十二錢二厘)

内

課金及利子金

千五百三十五萬八千二百二十五フランク七十四  
サ一ム(我三百〇七萬千六百二十五圓十四

錢八厘)

受業料

千八百二十五萬四千四百四フランク五十サ  
一ム(我三百六十五萬〇八百八十二圓九十

錢)

官費

九百三十八萬三千七百七フランク三十七サ  
一ム(我百八十七萬六千七百五十四圓〇七

錢四厘)



公立小學歲出

四千九百〇一萬六千〇二十七フランク十四サ  
ンチム(我九百八十萬〇二千六百〇五圓四十  
二錢八厘)

内

教師給料

四千二百三十二萬二千五百〇七フランク六十  
二サントム(我八百四十六萬四千五百〇一圓  
五十二錢四厘)

借家賃

二百三十二萬三千七百三十五フランク四十六  
サントム(我四十六萬四千七百四十七圓〇九  
錢二厘)

發兌書費

二萬四千三百六十八フランク五十三サント  
ム(我四千八百七十三圓七十錢〇六厘)

煖室費

百八十五萬六千七百四十四圓〇十七錢八厘  
ム(我三十七萬〇七百四十圓〇十七錢八厘)

書器  
營繕雜費

二百四十八萬八千七百四十四フランク六十四サ  
ンチム(我四十九萬七千七百四十二圓九十二  
錢八厘)

公私小學歲出

五千〇三十七萬五千二百五十五フランク五十五  
サントム(我千〇〇七萬五千〇五十圓〇十一  
錢)

内譯不詳

○師範學校

百七十一校

生徒

四千五百六十名

内男

三千三百五十九名

内女

千二百〇一名

歳入

二百八十一萬〇〇五十五フランク十八サント  
ム(我五十六萬二千〇十一圓〇三錢六厘)

内

扶助金

二百二十四萬五千八百十八フランク九十二サ  
ンチム(我四十四萬九千六百六十三圓七十八錢  
四厘)

課金

九萬九千八百六十六フランク二十六サントム  
(我一萬九千九百六十三圓二十五錢二厘)



受業料

四十六萬四千四百二十フランク(我九萬二千八百八十四圓)

歲出

二百九十萬〇千〇五十五フランク十八サシナ  
一△(我五十八萬〇二百一十一圓〇三錢六厘)

內

平常費

二百五十九萬八千三百二十二フランク六十二  
サシナ一△(我五十一萬九千六百六十四圓五十二錢四厘)

非常費

三十萬〇二千七百三十二フランク五十六サシナ  
一△(我六萬〇五百四十六圓五十一錢二厘)

○中學校

千二百六十三校

內公立

三百二十八校

九百三十五校

生徒

十四萬〇二百五十三名

歲入

六千四百四十六萬四千五百七十二フランク八  
十一サシナ一△(我千二百八十九萬二千九百十  
四圓五十六錢二厘)

內

扶助金

四百四十九萬〇七百九十一フランク〇四サシ  
ナ一△(我八十九萬八千五百五十八圓二十錢〇八  
厘)

委託金

百四十萬〇八千九百七十四フランク〇四サシ  
ナ一△(我二十八萬千七百九十四圓八十錢〇八  
厘)

受業料

五千八百五十六萬四千八百〇七フランク七十一  
三サシナ一△(我千七百七十一萬二千九百六十一  
圓五十四錢六厘)

歲出不詳

荷蘭國

○中學

八十九校

生徒

七千六百十八名



歲入 十九萬九千二百四十四フロリン(我九萬九千六百二十二圓)

內譯不詳

歲出 百三十三萬六千八百〇六フロリン(我六十六萬八千四百〇三圓)

內

教師給料 九十五萬三千四百七十六フロリン(我四十七萬六千七百三十八圓)

其餘不詳

○小學 三千七百三十四校

生徒 四十七萬四千四百四十八名

內男 二十五萬四千〇八十三名  
內女 二十二萬〇三百六十五名

歲入 五百十六萬六千四百四十三フロリン(我二百五十八萬三千〇七十一圓五十錢)

歲出 五百十六萬六千四百四十三フロリン(我二百五十八萬三千〇七十一圓五十錢)

國ヨリ出ス分 四十九萬四千百〇三フロリン

內州ヨリ出ス分 五萬七千九百四十二フロリン  
邑ヨリ出ス分 四百六十一萬四千〇九十八フロリン

合衆國

○大學 三百六十九校

內

二百五十九校ノ生徒五萬四千五百名

其餘不詳

○小學 十二萬千四百四十校

學齡人口 九百六十三萬五千二百〇八名

男 二百十萬〇四千八百四十三名

內女 二百萬〇〇九千五百二十二名

男女不詳 五百五十二萬〇八百四十三名



公學生徒

六百三十九萬二千四百八十五名

私學生徒

三十二萬八千七百七十名

總計就學六百七十二萬〇六百五十五名

不就學

二百九十一萬四千五百五十三名

歳入

六千四百五十九萬四千九百十九ドルラル五十九セント

内

學稅

五千百五十萬〇六千〇〇七ドルラル七十七セント

永久財本利子

二百八十三萬七千九百三十〇ドルラル〇八セント

別途財本利子

六十七萬四千〇三十七ドルラル八十七セント

地所賣却代金

三十九萬五千二百五十四ドルラル二十九セント

別途入金

八百五十二萬千百十四ドルラル〇二セント

内譯不詳

六十六萬〇五百七十五ドルラル四十八セント

歳出

五千六百五十一萬八千二百七十三ドルラル十セント

内

教師給料

三千百六十九萬四千五百四十九ドルラル八十三セント

薪炭

四百八十四萬三千九百十八ドルラル三十五セント



營繕

千五百五十九萬〇九百三十八ドルラル三十セ

書器

三十六萬七千三百七十七ドルラル四十四セン

雜費

四百二十四萬二千三百八十八ドルラル五十九

内譯不詳

三百五十九萬七千二百ドルラル〇〇五十九セ

公學積金

四千百〇六萬六千八百五十四ドルラル二十セ

○師範學校

八十一校

内校名詳ナル者七十六校  
内校名詳ナラザル者五校

生徒

四千七百二十五名

内男 千五百三十九名  
内女 三千百八十六名

卒業生徒

七千〇九十二名

學費一个年一人ニ付一百ドルラル乃至二百ドルラル

各州扶助金年額

每州一千四百五十ドルラル乃至一萬六千ドルラ

其餘歳入歳出詳ナラス

英吉利國

○吟味ヲ經タル小學 一萬〇九百四十九校



吟味ノ時出席シタル生徒百七十八萬〇五百二十八名

内

日學校生徒 百七十萬〇〇三百〇四名

内男 九十三萬九千二百〇三名  
内女 七十六萬千〇一名

夜學校生徒 八萬〇二百二十四名

内男 五萬八千四百五十六名  
内女 二萬千七百六十八名

日々出席平均數 百四十五萬三千五百三十一名

内日學校 百三十七萬六千五百八十七名  
内夜學校 七萬六千九百四十四名

一萬〇九百四十九校ノ内七百七十八校歳入歳出不分明其餘一萬〇百

七十一校ノ歳入歳出左ノ如シ

歳入

百八十一萬〇六百八十六ポンド七シユルリン  
十一ペンス(我八百七十六萬三千七百二十二圓  
十八錢二厘六毛)

内

共社金 七萬七千二百二十八ポンド九シユルリン  
ソヌ(我三十七萬三千七百八十五圓八十七錢八  
厘八毛)

寄附金 四十九萬〇五百八十一ポンド十四シユルリン  
(我二百三十七萬四千四百十五圓四十二錢八厘)

受業料 六十萬四千八百〇二ポンド十一シユルリン  
ペンス(我二百九十二萬七千二百四十四圓五十  
二錢二厘八毛)

政府扶助金 六十萬七千七百十九ポンド十二シユルリン  
ペンス(我二百九十四萬千三百六十二圓九十五  
錢四厘四毛)

別途入金 三萬〇三百五十四ポンド〇〇三ペン  
ス(我十四萬六千九百十三圓四十二錢七厘八毛)

歳出

百八十一萬二千二百三十八ポンド十八シユル  
ソグ一ペンス(我八百七十七萬千二百三十六圓



内

二十九錢八厘六毛

俸給

百四十三萬九千九百四十一ポンド四シエルリン  
グ十ペンヌ(我六百九十六萬九千三百十五圓六  
十三錢四厘)

書籍器械

七萬七千三百三十二ポンド九シエルリン  
グ八ペンヌ(我三十七萬四千二百八十九圓二十三錢八  
厘八毛)

雜入費

二十九萬四千九百六十五ポンド三シエルリン  
グ七ペンヌ(我百四十二萬七千六百三十一圓四十  
八錢四厘二毛)

○師範學校

三十八校

内

男子師範學校

十五校

女子師範學校

十六校

男女師範學校

七校

生徒

二千九百三十三名

歳入

十二萬三千七百七十ポンド二シエルリン  
グ八ペンヌ(我五十九萬九千〇四十七圓四十六錢四厘  
八毛)

内

政府扶助金

九萬四千九百四十ポンド九シエルリン  
グ八ペンヌ(我四十五萬九千五百一十一圓九十五錢八厘八  
毛)

地代

千七百七十六圓五十五錢九厘二毛

寄附金

一萬八千四百八十八ポンド十六シエルリン  
グ七ペンヌ(我八萬七千八百四十圓〇三十五錢〇二毛)

受業料

五千五百三十七ポンド八シエルリン  
グ十ペンヌ(我二萬六千八百〇一圓二十四錢二厘)



エキスヒビシヨ

有志輩隨意ニ生徒幾名ノ學資ニ充テ若干金ヲ寄附スルモノナリ

百六十五ポンド (我七百九十八圓六十錢)

寺區集金

三百五十七ポンド十五シエルリング四ペンス (我千七百三十一圓六十錢〇〇四毛)

書籍拂下代

二千六百五十三ポンド十一シエルリング七ペンス (我一萬二千八百四十三圓三十四錢〇二毛)

別途入金

八百五十六ポンド三シエルリング六ペンス (我四千四百四十三圓九十錢〇一厘六毛)

歳出

十一萬四千七百五十九ポンド一シエルリング五ペンス (我五十五萬五千四百三十四圓四十二錢六厘一毛)

内

職員及教員給料

三萬千七百三十六ポンド一シエルリング六ペンス (我一十五萬三千六百〇二圓六十一錢七厘六毛)

書器筆墨紙

四千九百五十八ポンド十九シエルリング五ペンス (我一萬四千〇〇一圓四十三錢一厘)

出板等入費

二千三百二十四ポンド十三シエルリング五ペンス (我一萬千二百五十一圓五十一錢九厘)

賄料

四萬千〇六十ポンド八シエルリング一ペンス (我十九萬八千七百三十二圓三十五錢八厘六毛)

洗濯費

三千〇四十九ポンド十八シエルリング六ペンス (我一萬四千七百六十一圓六十五錢一厘六毛)

小使給料

四千六百四十四ポンド十五シエルリング十一ペンス (我一萬〇百五十七圓四十三錢五厘二毛)

薪炭瓦斯

四千五百二十三ポンド十四シエルリング七ペンス (我一萬二千八百九十五圓〇六錢九厘六毛)

醫料

千八百一十一ポンド五シエルリング五ペンス (我五千七百一十七圓三十六錢三厘)

器具及修繕

九千六百六十五ポンド三シエルリング十一ペンス (我一萬四千七百七十九圓五十四錢七厘八毛)

地税金等

五千五百〇四ポンド五シエルリング (我一萬六千六百四十圓〇五十七錢)

遊園入費

六百七十二ポンド六シエルリング五ペンス (我三千二百五十四圓〇四錢五厘)

諸雜費

二千五百八十ポンド九シエルリング三ペンス (我一萬二千四百八十九圓四十四錢五厘八毛)

模範學校費

千七百一十一ポンド十八シエルリング十ペンス (我五千六百七十二圓二十二錢二厘)

臨時入費

二千六百七十五ポンド一シエルリング二ペンス (我一萬〇四百七十八圓八十八錢七厘二毛)



獨乙國

○大學

二十一校

生徒

一萬八千名

○平民學校

六萬校

生徒

六百萬名

○中學校

千五百四十一校

生徒

十七萬七千三百七十九名

歲入歲出總テ詳ナラズ

奧地利國

○大學

六校

生徒

八千六百七十六名

○平民學校

三萬二千二百七十九校

生徒

百三十一萬七千五百九十五名

○中學校

百四十六校

生徒

四萬七千六百四十一名

○師範學校

六十五校

生徒

二千三百二十二名

○小學

千二百十七校

內公立

二百〇六校  
私立 千〇十一校

生徒

七萬四千二百三十三名

歲入歲出總テ詳ナラズ



文部省雜誌  
第三十卷  
第二十一號

Faint text listing contents or page numbers, possibly including titles like 小説, 詩歌, etc.



文部省雜誌第二十號

明治七年十一月七日發行

米國教育日誌ヨリ抄譯ス

ジエー、バルドウ井ン氏學校管理說

學校規則

昔日ノ教師ノ生徒ヲ教フルヤ左手ニ規則書一卷ヲ持チ右手ニ朴一本ヲ携ヘテ之ニ臨メリ方今ノ教師或ハ規則書モナク亦朴ヲモ携ヘス其昔日ト相反スル寛猛懸隔セリ此寛ト猛トノ衷ヲ折ルキハ宜ク緊要ノ規則ヲ制定ノ以テ之ヲ施行セサル可ラス

第一條 規則ハ數條ニシテ其要旨ヲ盡スヲ要ス



第二條 規則ハ其之ヲ用ル一偏ナラスノ普通ナルヲ要ス

第三條 規則ハ必ス教師ノ許諾首肯スルモノヲ要ス

第四條 規則ハ必ス生徒并ニ其監護人ノ許諾從事スヘキモノヲ要ス

第五條 規則ハ必ス教師ノ實地ニ施シ得ベキモノヲ要ス

第六條 規則ハ必ス善良ノ習慣ヲ得セシムルヲ要ス

規則

其要求スル所ノモノ左ノ如シ

第一 規則ヲ愆ラサル事

第二 迅速ナル事

第三 身ヲ脩メ行ヲ正スル事

其禁止スル所ノモノ左ノ如シ

第四 無益ニ音聲ヲ發スル事

第五 行狀正カラサル事

第六 互ニ相談話スル事

第一 規則ヲ愆ラサル事○教師及ヒ生徒ハ勉テ出席ノ時限ヲ愆ラサルヲ要ス而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 大ニ生徒ヲノ勉學ノ意ヲ發セシムヘシ然ルルハ自然規則ヲ愆ラサルヲ得ヘシ

第二 監護人ヲノ其意ヲ得セシムヘシ監護人知識アリテ能ク其意ヲ得レハ一日モ甘メ其監護スル生徒ノ闕席スルヲ許サザルベシ

第三 規則脩マラザルルハ必ズ種々ノ弊害ヲ生ズ是最注意セザルベカラザルモノナリ凡ソ規則ヲ愆ルハ生徒及學校ノ大不幸ニシ若



シ斯ノ如クニメ改メザルキハ自己ノ席ヲ失ヒ其等級ニ在ルコ能ハザルノミナラズ終ニ其學校ニ於テ全ク己レカ位置ヲ失フニ至ルベシ

第四 規則ヲ遵守ノ毫モ愆ラザルヲ以テ職掌ト爲スベシ且教師ハ自己ノ面目利害ヲ顧ミ且正直慈愛ヲ以テ各生徒ヲ獎勵シ出席ノ勞ヲ憚ラシムル勿レ

第二 迅速ナル事○各人其職掌ヲ奉ズル常ニ誓テ迅速ナルヲ要スヘシ而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 教師ヲ登校迅速ナラシムヘシ教師ハ一刻モ遲緩ス可ラザルノミナラズ遅クモ開校十五分前出校スルヲ要ス

第二 講習ノ初課ハ特ニ生徒ノ樂ミ學ンデ倦マザルモノヲ要ス

第二 遲刻セル生徒ノ名簿ヲ備ヘ而シテ休息ノ時間校外ニ出ルキハ此遲刻セル生徒ヲ其遲刻ノ原由ヲ辨解セシムベシ而シテ其辨解スル所曖昧ナレハ校外ニ出ルヲ許サズ

第四 事ノ迅速ナルハ最切要ノコトニ遲緩ノ甚弊害アルコトヲ指示シ生徒ニ之ヲ了解セシムベシ凡ソ遲緩ナルハ其身ニ於テ一ノ不幸ニシ且人ニ對シ愧ベキノ甚キナリ能ク此意ヲ悟リテ規則ヲ守ルキハ衆意快適ニシテ自ラ樂ミ學ブモノナリ或時華盛頓氏懶惰ナル士官ニ謂テ曰ク汝自ラ汝ノ時間ヲ費スハ妨ナシト雖モ吾輩ノ時間ヲ費スノ權ナシト監學ハルリ区ノ說ニ依レハ規則ヲ愆ルト迅速ナルトハ能ク學校ヲ管理スルト否ト關係ノ在ルトコロナリト

第三 身ヲ脩メ行ヲ正スル事○教師及生徒ハ共ニ同心協力ノ正直ノ



事ヲ爲スベシ而シテ其之ヲ爲スヤ其法ト時トニ於テ正直ナルヲ要ス身ノ脩マリ行ノ正シキモト習慣ノ致ス所ナリ縱令其教ヘノ善キモ亦其規則ノ善キモ之ヲ習慣スルニ非レバ最良ノ功ヲ奏スルコトナシ只習慣ニ因テ之ヲ養成スルニ在ルノミ而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 教師ハ必ズ兒童ノ模範タルベシ兒童ハ其風必ス教師ノ如クナルベシ故ニ身ノ脩リ行ノ正シキハ常ニ教師ノ要領トスル所ナリ酒ヲ飲ミ口ヲ弄シ鄙陋侮慢ニシテ行ノ正シカラザル教師ヲ置キ以テ教場ヲ汚ス勿レ

第二 生徒ハ之ヲ習慣ノ行ヲ正スルノ風俗ヲ得セシムベシ且生徒ヲ教育スルニハ務テ其行ヲ正直ナラシムルヲ要ス是レ何ノ時ヲ問ハス何ノ所ヲ論セス總テ同様ナルヲ要ス

第三 生徒ヲ身ヲ脩メ行ヲ正スルハ則チ功ヲ奏シ且幸福ヲ得ルコトヲ確知セシムルヲ要ス是第一緊要ノモノナルカ故ニ間斷ナク教示スベシ近來ゴーウ氏著ス所ノ修身正行ノ書アリ其書タルヤ至貴至重教師及ビ生徒ノ至寶ト謂フベキ者ニシテ忽畧ナル教育ヲ一變スルモノナリ

第四 無益ニ音聲ヲ發スル事○人皆心ヲ專一ニシテ無益ノ音聲ヲ發セザルニ注意スベシ沈靜ナル風習ヲ得セシムルハ教場ニ於テ關ク可ラザルノ事ニシテ各教師ノ机上ニ揭示スベキモノナリ而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 靜ナルヲ要ス教師浮動喧躁ナルハ必ズ學校ヲ亂スベシ言語ハ中音ニシテ動作沈靜ナルヲ要ス然レ其事ヲ作スニ當テハ氣力ア



ルヲ要スベシ

第二 教場騷擾ヲ禁ズベシ

第三 其靜ナル必ス道理ヨリスベシ恐怖ヨリス可ラズ

第四 生徒ヲ習慣ノ靜ナル風習ヲ成サシムベシ凡テ喧雜ノ事ハ丁

寧反復ノ靜ニ之ヲ爲サシムベシ然ルキハ縱令喧囂中ニアリトモ生

徒ノ氣漸ク靜ニシテ教場騷擾ノ患ナク學校ノ幸福疆ナキニ至ルベシ

第五 行狀正カラザル事○教師生徒共ニ誓テ不正ノ事ヲ避ルヲ要ス

而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 例ヲ示ノ之ヲ教フベシ

第二 一惡アレハ即チ之ヲ刺斥スベシ而シテ生徒神聖ヲ辱メ或ハ虛

偽ノ言行ヲナス如キスベテ廉耻ヲ破ル事ヲ深ク戒ムベシ

第三 行狀正カラザレハ必ズ不幸ヲ生ズルコトヲ示スベシ

第四 生徒ヲ習慣ノ直ヲ愛シ強テ之ニ就カシムルヲ要ス又曲ヲ惡

ミ強テ之ヲ避シムルヲ要ス

第六 互ニ相談話スル事○各生徒教場ニアル時間中ハ教師ニ依ルニ

非レバ互ニ相談話セシムル勿レ是最犯ス可ラザルモノニシテ之ヲ犯セ

バ順序亂ル、ノ基トナルベシ而シテ其施行スベキモノ左ノ如シ

第一 教師ノ心鐵石ノ如クナルヲ要ス而シテ教師ノ心確乎トシテ生

徒互ニ相談話スルヲ許スナキノ意ヲ深ク其心ニ貫徹セシムベシ

第二 必ズ談話スルヲ許ルス勿レ

第三 生徒ヲシテ此規則ヲ犯スヨリ生ズル所ノ弊害ヲ確知セシムル

ヲ要ス



第四 宜ク相談話スルヲ防クベシ其法教師己カ容貌或ハ言語或ハ暗號或ハ己カ位置ヲ轉ズルニ因テ之ヲ爲スベシ

第五 生徒ヲ習慣メ互ニ相談話スルノ風ヲ成サシムル勿レ是百級ノ學校ニ於テ爲ス所ナリ故ニ彼ノ學校ニ於テ爲ス所ノモノハ此學校ニ於テモ亦之ヲ行フテ可ナリ

總論○此六則ハ其適用スル所何等ノ校ヲ論ゼス小學大學共ニ均ク適スルモノナリ而シテ教師生徒及ビ監護人ノ許諾スベキモノニシテ實ニ方今普ク採用スル所ナリ學校教師ハ或ハ變ゼザル可ラザル者アリト雖モ規則及告示ニ至テハ之ヲ變ゼザル可キナリ

將來ノ市民○凡ソ兒童ハ家族ヨリ出テ學校ニ入り幾多ノ勉勵ヲ累テ學校ヨリ出テ尙一層繁劇ナル今日ノ世務ヲ執リ爰ニ市民ノ責ニ任シ

爰ニ市民ノ權利ヲ得ベシ凡ソ兒童ハ其家ニ在ルヤ父母之ヲ保護誘導シ其學校ニ在ルヤ教師教ルニ能ク自主自由ノ權ヲ保テ且他人ヲモ扶助スルノ事ヲ以テ區抑學校ハ教師ヲ以テ統領トセル一小共和政治ノ如ク兒童ハ爰ニ教育ヲ受クル市民ノ如シ又學校ハ恰モ一社中ノ如ク教師ハ即チ其社長ニシテ生徒ハ即チ交際上ノ指揮教令ヲ受クルモノナリ

生徒ハ恰モ教師ノ選者ノ如キモノナリ何トナレハ教師生徒ヲ教導シ生徒ヲ自ラ任シ法律ニ恪遵シ且甘シ正善ノ規則ヲ遵守シ且之ヲ保持セシムルヲ教ルノ巧拙ニ因テ或ハ再選ヲ得或ハ否ラザルヲ以テナリ

規則制立ノ事○今新ニ規則ヲ設ケント欲スルモハ教師先ツ某ノ規則